

「大会を通して心を動かされた人がいるなら、障害者とじかに接する機会を持ってほしい」－自立生活センター神戸 Be すけっと 藤原久美子事務局長の言葉（9/6 岐阜新聞より）

「出演した全員に責任がある。言い逃れせずに謝罪してほしい。そうしないと、反権力の色があるヒップホップがダサくなる」－ラッパー REINO さんの言葉（9/6 中日新聞より）

「漁師から正当な価格で仕入れるのが重要。買ったたくと持続可能な事業にならない」－岩手県最北端の漁場「うに牧場」のバーチャルツアーを企画した北三陸ファクトリー 下芋坪之典 CEO の言葉（9/7 岐阜新聞より）



七コロナハ起き

－ 今週、心に響いた言葉たち ④⑧ －



「生活は落ち着いたが、この日になるといろいろな思いがこみ上げる。今は亡くなった人のご冥福を祈りたい」－2018年9月に起きた北海道地震で自宅が全壊した徳竹広子さんの言葉（9/7 中日新聞より）

「生理用品を配布することが目的ではなく、公的な機関とつながるきっかけとしたい。不安を抱えている人たちの支えとなれば」－新型コロナウイルスの感染拡大の影響で生活や経済面で不安を抱える女性に寄り添うぎふNPOセンター 野尻智周事務局長の言葉（9/8 岐阜新聞より）

「人は珍しいものを前にすると本能的に誰かに知らせたくなる。スマホで写真を撮り、SNSで発信する行為は、こうした心理が働いている」－SNSに詳しい新潟青陵大大学院 碓井真史教授の言葉（9/8 中日新聞より）

「重症患者の搬送は危険が伴い、死亡例もある。エクモカーで治療に切れ目ができないよう万全な態勢を取り、一人でも多くの命を救いたい」－人工心肺装置 ECMO を患者に装着したまま搬送できる『エクモカー』の運用を始めた都立多摩総合医療センター 清水敬樹救命救急センター長の言葉（9/9 岐阜新聞より）

「特に平日が厳しい。毎日十人ずつ不足しているような状況。需要に対する供給が追いついていない」－日赤東海北陸ブロック血液センター 松尾新吾推進係長の言葉（9/9 中日新聞より）

「どうしても今すぐ器がいるという家庭はないと思うが、それでも買いに来てくれるのはありがたかった」－道の駅『志野・織部』 田中知敏駅長の言葉（9/10 中日新聞より）

「平和は当然のものではない。みんなが心に余裕を持って協力し合えば、コロナも核兵器も解決できるはず」－広島での平和記念式典で「平和の誓い」を朗読した五日市東小6年 宅味義将君の言葉（8/7 中日新聞より）

「何を脳に入れるか、吟味することが大事。まずは一日5分でいい。デジタル機器から離れてぼんやりする時間を」－おくむらメモリークリニック 奥村歩医師の言葉（8/9 中日新聞より）

「男性中心で女性に差別的な日本社会の問題が、どんな時よりクリアに見えた。五輪の予想外の収穫だった」－大妻女子大学 田中東子教授の言葉（8/10 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④7 —



「戦争体験者が高齢化し、敵基地攻撃能力が取り沙汰されるような世の中になった。戦争を知らない世代に悲惨な実態を伝えたいという思いが募るばかりです」－ちば・戦争体験を伝える会 市川まり子代表の言葉（8/岐阜新聞より）

「現地で寄り添う人、見聞きしたことを持ち帰る人、広める人。皆さんが将来どんな仕事に就いても、平和のために必ず“持ち寄り合える役割、ってあるんじゃないかな」－国内外の戦地や被災地で活動が続けるフォトジャーナリスト・安田菜津紀氏の言葉（8/12 中日新聞より）

「留置場を、この先どう生きるか見つめ直すための空間にしてもらいたい。そのためにも、緊張を和らげ、人として対等であろうと心掛けています」－県警の女性警部として初めて留置場管理のトップになった長屋里美岐阜北署留置管理課長の言葉（8/13 岐阜新聞より）

「早く（路上に）戻りたい。ずっと一人で、夢中で踊ってきたから、今も踊ることばかり考えてる。まだまだ踊るよ。体が動かなくなったら顔だけでも踊る。それでこそ芸人だから」－国内外の街頭で50年以上踊り続けてきた大道芸人・ギリヤーク尼ヶ崎氏の言葉（8/15 岐阜新聞より）

「学校は私たちの多様性を認めずに多様性を教えられない。自分らしくいられる学校が当たり前になれば」－岐阜市内のフリースクールに通う中学3年のアイラさんの言葉（8/15 中日新聞より）

「政治家は私たち（戦争体験者）とは変わった考えをしているようだ。戦争だけは絶対避ける考え方を持ってほしい」－全国戦没者追悼式の最高齢遺族となった長屋昭次氏の言葉（8/17 岐阜新聞より）

「(新型コロナウイルスでインド由来のデルタ株が) これまで知られた中で最も感染力の強いウイルスの一つ」－米疾病対策センター ワレンスキー所長の言葉 (8/2 岐阜新聞より)

「地盤災害はほとんどが水絡み。今回(7月、熱海市伊豆山で発生した土石流災害)は自然の水の循環システムの一部で起こり、人間が自然の排水システムを侵したことが原因」－名古屋工業大学 松岡元名誉教授の言葉 (8/2 中日新聞より)

「すごく不思議な気持ちの中にいます」－東京五輪で競泳女子日本初の2冠を達成した大橋悠衣選手の言葉 (8/3 中日新聞より)



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④6 —



「被爆者が身近にいない生徒も多く、原爆に対する感覚は変わってきた。それでも自分たちの目線で作り上げている」－原爆をテーマにした創作劇を半世紀にわたって上演してきた広島市の舟入高校演劇部OB・顧問 小山耕平教諭の言葉 (8/3 岐阜新聞より)

「美術館は作家にとっても、地元の人にとっても、新しい自分に出会う場であってほしい」－今春、岐阜県現代陶芸美術館の館長に就任した石崎泰之氏の言葉 (8/4 岐阜新聞より)

「自宅療養の場合、医療関係者がリアルタイムで感染者の体調の変化をつかむのが難しい。自宅療養する人に電話してすぐに出てくれるか、電話でのやりとりだけで症状が分かるかといった問題が付きまとう。入院などが必要になったのに手を打つのが遅れれば、自宅で亡くなるケースも生じかねない」－首都圏の複数の医療機関で在宅医療を中心に手がける木村知医師の言葉 (8/5 中日新聞より)

「小手先の知識を伝えても何も改善しない。信頼を得るための最初の一步は、じっと聞くこと」－福島原発事故の翌年から避難指示が出た町村の健康診断に向き、「よろず健康相談」ブースを開設した元長崎大病院・助教 熊谷敦史氏の言葉 (8/5 岐阜新聞より)

「パラリンピックは、危機的な感染状況が続けば、誰もが無観客が望ましいと考えるだろう。一般の人や選手らの命を感染から守らないといけない。迅速に冷静な判断が求められる。今は流行が収まり、無事に大会が終わることを祈っている」－厚労省研究班救急医 横田裕行氏の言葉 (8/8 岐阜新聞より)

「学びのきっかけは常にどこにでもあります。大切なのは、目の前の事象に興味を持ち、それを読み解く視点です。この視点が自律的な学びにつながり、その後の子どもの生き方を変えていくと考えます」－岐阜大学 田中伸准教授の言葉（7/5 岐阜新聞より）

「インフルエンザを見ても分かるように、ワクチンと治療薬がセットになって初めて、かつての日常に戻ることができる。社会が集団免疫を獲得する目安である接種率6、7割まで、程度の差こそあれ、対策は引き続き徹底していくべきだ」－岐阜市医師会長 広瀬洋医師の言葉（7/6 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④5 —

「健康は善で病気は悪だと決めつける人がいるが、それは違う。闘病もそう。病気を克服した人はヒーローで負けた人はかわいそうな人ですか？ 僕はそうは思わない」－6月30日70歳で亡くなった元プロ野球選手・大島康徳氏の言葉（7/6 中日新聞より）

「障害のある子の子育てでは特に、親の想像をはるかに超えた成長を見せてくれる『ごほうび』のような瞬間があります」－ダウン症の子どもをもつ女優・タレント 奥山佳恵さんの言葉（7/7 中日新聞より）

「馬は本来穏やかな動物。人間側に技術があれば、やんちゃな馬でも得意分野を育てて第二、第三の人生につなぐことができる」－NPO法人『引退馬協会』
沼田恭子代表の言葉（7/11 岐阜新聞より）

「国の線引きが原爆被害者を分断している。これまで原爆被害者は狭く、小さく、軽く見られていた」－被爆者の全国組織『日本原水爆被害者団体協議会』・県原爆被爆者の会『岐朋会』 木戸季市事務局長の言葉（7/15 岐阜新聞より）

「日本語で考えたり表現することが、今の自分には自然なこと。まだ不自由はあるが、母語でないから書けるものがある」－『彼岸花が咲く島』で第165回芥川賞を受賞した李琴峰氏の言葉（7/15 中日新聞より）

「人のまねをするのではない。みんなの見本になるような横綱でいたい。生き方で証明したい」－横綱に昇進した照ノ富士の言葉（7/22 中日新聞より）

「薬物依存はもっと大きな自分になろうとする欲求の表れなのだと思う。皆ありのまま
でいいんだと伝え続けたい」－覚醒剤取締法違反で3度の有罪判決を受けながらも、更生への地道な
努力に恩赦が認められた岐阜ダルクスタッフ・山田興久氏の言葉（6/8 中日新聞より）

「将棋以外のことを勉強したいという気持ちがずっとあった。やるからには難しくて、
将来役立ちそうなものを、と」－公認会計士試験に合格した将棋六段のプロ棋士・船江恒平氏の言
葉（6/11 中日新聞より）

「地域経済にとって大変大きな打撃。だからといって、無理にやるというわけにはいか
ない」－郡上踊りと白鳥おどりの2年連続通常開催見送りを発表、会見した日置敏明郡上市長の言葉（6/12
中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④ —



「とてもハッピー。きょうは楽しむことができた。本当に幸せ。（これまで）困難なこ
ともあった。ここでいま感情を言葉に表すのは難しい」－全仏オープン女子シングルスで初優
勝を果たしたバルボラ・クレイチコバ選手の言葉（6/13 中日新聞より）

「脱石炭、脱炭素の実現にはもっと大きな動きをつくっていかねばならず、むしろ
これからが重要だ」－ゴールドマン環境賞を受賞した、市民団体『気候ネットワーク』の平田仁子理
事の言葉（6/16 中日新聞より）

「現場に着いた時、思わず叫んでしまった。空が広く、緑が豊かで、私よりも岐阜の方
が主役にふさわしいと思う」－西濃地域を舞台にした地方創生ムービー『ブルーヘブンを君に』で初
主演を務めた歌手・由紀さおりさんの言葉（6/16 岐阜新聞より）

「(2年前に)大学卒業後も日体大で練習している中で、自分に向けてのエネルギーより、
後輩に教え、学生が喜んでいる姿を見る方が自分にとって大きな喜びになってきた。自
分の選手としての去り時は今だと思った」－現役引退を表明した2016年リオデジャネイロ五輪体
操男子団体総合金メダリスト・白井健三氏の言葉（6/17 岐阜新聞より）

「(水泳教育は)水中で子どもたちが自身の命を守る能力を身に付ける機会でもある。感
染のリスクと同様に、授業をしないことのリスクも考えなければいけない」－鳴門教育大
学 松井敦典教授の言葉（6/24 中日新聞より）

「われわれの放送がアイヌ民族への正しい理解に水を差し、時計の針を戻してしまった。責任を痛感している」－北海道アイヌ協会の総会で、情報番組がアイヌ民族に不適切な表現を使った問題に対し謝罪した小杉善信日本テレビ社長の言葉（6/7 岐阜新聞より）

「巧い役者、面白い役者には、かならずといってよいほど『器量を忘れる』瞬間が訪れる。カメレオン俳優、怪優、サイコ俳優…こうした側面を持ち合わせていないと、役者は生き残れない」－翻訳家・評論家 芝山幹郎氏の言葉（6/7 岐阜新聞より）

「自宅で時間がある今こそ、自分の手を動かして何かを作る楽しさを伝えたい」－日本や岐阜の伝統を取り入れる岐阜在住の編み物作家 ベルン ド・ケストラ氏の言葉（6/8 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④③ —



「二度とこうしたことを起こさせない、起こる前に止めるということをやりとげるまで頑張っていく」－上司のパワーハラスメントが自殺原因と労災認定。遺族との和解が成立したトヨタ自動車・豊田章男社長の言葉（6/8 中日新聞より）

「僕の気持ちはシンプルにBMXをうまくなりたい。もちろん五輪があればいいですけど、なくても常にBMXがうまくなりたいということ」－自転車BMXフリースタイル・中村輪夢選手の言葉（6/9 岐阜新聞より）

「コロナ禍を扱い創作をしている人は、どこか暗いか、逆に無理に明るくしようとするか。そんな直球な表現ではなく、ひとひねりさせたい」－多治見市出身の現代美術作家・河地貢士氏の言葉（6/9 岐阜新聞より）

「人が親切であったかい。支えてくれる人がいなければここまでこられなかった。多治見は第二の故郷だ」－多治見市陶磁器意匠研究所のセラミックスラボを終了、コロナ禍で強いられた滞在延長を乗り越え母国に帰ることが決まったセルビア人陶芸作家 ヨバナ・チャボロビッチ氏の言葉（6/10 中日新聞より）

「センターで救命でき、最初に入院していた病院へ戻れたら幸運だが、亡くなる人もいる。ひとごととと思っていたことで、自分や家族が命を落とすことにもつながる。命懸けで宴会をしたいですか、命を懸けてでも同席したい食事の相手ですかと、自分に問い掛けてもらいたい」－岐阜大病院・小倉真治高次救命治療センター長の言葉（6/10 岐阜新聞より）

「新型コロナウイルスによる感染症でこの1年、私たちは地域に籠って暮らしてきた。果たして、そこが自分の好きな場所であること、カミが宿る場所であることを確認できただろうか。これからの時代は、人々が新たに自分の故郷となる場所を見つけ出すことになる」—総合地球環境学研究所 山際寿一所長の言葉 (5/1 岐阜新聞より)

「今この瞬間を充実させることが、将来につながる。昨日できなかったことが明日できるようになるよう、夢を持って日々挑戦していく」—57歳の名古屋工業大学2年生・加藤文彦 硬式野球部員の言葉 (5/2 岐阜新聞より)

「『教育を受けたい』と言っただけで命を狙われる環境から、(ノーベル平和賞を受けた) マララ (・ユスフザイ) さんのような女性が出たことは奇跡だと思います。そんな奇跡が二つ、三つと重なっていくことで世界が変わっていく。子どもたちの選択する自由を認めていくことが何より大事なことだと考えます」—映画監督・成島出氏の言葉 (5/3 中日新聞より)



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④ —



「巨大なサンゴが何百年と暮らし続けられているということは、長い間それに適した環境が続いてきたということ。それが今の時代に変化するのか、させないでいられるのか。そのあたりを見ていく中心的存在にもなる」—海の環境 NPO 法人 OWS 副代表理事・自然写真家 高砂淳二氏の言葉。長崎県五島列島で世界最大級のオオスリバチサンゴが確認されたことを受けて (5/4 中日新聞より)

「小さな子が時間を忘れて何かに夢中になっている姿を見ると、その集中力に驚かされます。好きなことをしている子どもはエネルギーに満ちています。しかし、成長するにつれ『自分が好きなこと』ではなく『他人にどう思われるか』が物事を選ぶ基準になってしまうのではないのでしょうか」—世田谷区立桜丘中学校前校長 西郷孝彦氏の言葉 (5/5 岐阜新聞より)

「(政治や行政に携わる人たちは) 果たして寄席の実態を知っているのか。外国人にアピールできる観光資源とだけ考えているのかもしれないが、国民のためのものだという感覚を強く持ってもらいたい」—演芸評論家 矢野誠一氏の言葉 (5/5 中日新聞より)

「日本酒を出せないのは片方の翼をもがれたようなもの。それでは飛ぶことはできないよね…」—豊橋駅前にある居酒屋『旬肴地酒 寅八』の経営者・鈴木初彰氏の言葉 (5/8 中日新聞より)

「自分たちより、もっともつらい思いをした方々がたくさんいる。福島の人たちと一緒に頑張ろうという気持ち」－前頭二枚目・若隆景の言葉（3/17 中日新聞より）

「標的のような大きな物をつり下げても安定していた。（後継の）F15 が高級車なら、F4 はダンプカーだった」－自衛官時代、岐阜基地で操縦士を務めた坂澤博光氏の言葉。F4 のラストフライトに際して。（3/18 岐阜新聞より）

「食料が手に入らず、『飢えの戦争』が始まった」－カイロ在住のハシャム・メッカ氏の言葉（3/18 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④ —

「自分の体のことを決めるのは自分自身だと伝えていきたい。もう 2021 年ですから」－タレント 渡辺直美さんの言葉。（3/20 中日新聞より）

「僕が自然な感情からガーナに行きたい、ごみで油絵を描こうと思ったように、心で思ったことは DNA と密接だと思います。願わくばそれが持続可能な世界につながっていると、僕もうれしいです」－アフリカ・ガーナのスラム街「アグボグブロシー」の電子ゴミからアートを作る美術家・長坂真護氏の言葉（3/21 中日新聞より）

「ビキニ事件は核兵器反対運動の原点です。遠い過去に終わったことではなく、未来の命に関わる事件です」－ビキニ事件で被爆した焼津市のマグロ漁船『第五福竜丸』の元乗組員・大石又七氏の言葉（3/22 中日新聞より）

「作曲はイメージ、演奏はライブ感。若い人に演奏を教えるのも刺激になる。すべて楽しい」－作曲家・演奏家・大学教授 本多俊之氏の言葉（3/25 中日新聞より）

「体が悲鳴を上げ『無理なのかな』と。気持ちが切れて、中途半端に土俵に上がるわけにはいかなかった」－3月24日に引退した第71代横綱鶴竜の言葉（3/26 岐阜新聞より）

「志村さんは勉強家で古今東西の喜劇や映画、音楽を研究し、練りに練り上げて笑いに生かした。だから志村さんのコントは時代も世代も国境も超え、みんなを笑わせるんです」－お笑い評論家・西条昇江戸川大教授の言葉（3/26 中日新聞より）

——今週、心に響いた言葉たち (41) 2021. 4. 30

「悩むより工夫すればいい。震災でゼロじゃなく、マイナスから始まったんだから」－南三陸さんさん商店街初代組合長 及川善祐氏の言葉（3/8 中日新聞より）

「大企業は経営を継続できたのに零細企業は閉鎖を迫られた。そもそも州政府にそんな権限があるのか。学校閉鎖は子ども、家族に悪影響を与えた。女性は『もうたくさん!』と思っていたはず。良質な保守の主張を広める必要を感じた」－カンザス州で史上最年少の女性上院議員となったクリステン・オシェイ氏の言葉（3/2 中日新聞より）

「(バットを持てば) そりゃ負けたくない気持ちになるでしょ。本能ですから」－アリゾナ州ピオリアで行われているマリナーズキャンプで紅白戦に出場したイチロー氏の言葉（3/9 岐阜新聞より）



七コロナへ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④ —



「若い人には、周りがどう思おうと、好きなことは妥協しないで突き詰めてほしい。道は一つではない。最初に目指した未来と違ってても楽しく歩めます。気持ち次第です」－ものまね芸人 ニッチロー氏の言葉。（3/10 中日新聞より）

「10 年が過ぎてからがより重要になる。大事なものは傾聴だ。時がたつほど、きめ細かな対応が必要になる」－内堀雅雄福島県知事の言葉（3/11 岐阜新聞より）

「少しスランプに陥っている時に自信を持ち続けるのは若い選手にとって難しい。それでも自信を持って打ち続けなければならない」－米プロバスケットボール NBA のウィザーズ・ブルックス監督の言葉（3/12 岐阜新聞より）

「いじめや不登校のように、解決策を示すことができない。ひたすら聞くことしかできなかった」－2011 年 7 月、震災復興支援教員として宮城県東松島市の矢本東小学校に赴任した鷲見隆司氏の言葉（3/13 中日新聞より）

「冷戦が終わった時、私はようやく人々が平等の実現に力を注げると思いました。しかし現実とは逆でした。みんなが格差の問題への興味を失っていった」－2017 年にノーベル文学賞を受けた英国人作家 カズオ・イシグロ氏の言葉（3/13 岐阜新聞より）

「モットーは、選手に興味を持って、放っておくこと。若いころは少しでも修正しようとしたが、それは自分の知識をひけらかしているだけだと思った」－FC 岐阜 安間貴義監督の言葉（3/14 中日新聞より）

「原発と新型コロナで、専門家に任せているとどうもいけないらしい、というところに来たのではないのでしょうか。コロナで専門家の情報を受ける側になって、みんなの不安が分かりました。そのためにも地震学者が等身大で社会に関わることが大切ではないかと思っています」－慶應義塾大学・大木聖子准教授の言葉（3/1 中日新聞より）

「原発の問題は与党も野党もない」－小泉純一郎元首相の言葉（3/2 中日新聞より）

「命を守るアイテムは人それぞれ。市販の防災セットを買った場合、そこから自分には必要ない物を取り除き、空いたスペースに必要な物を足す作業をしてほしい」－清流の国ぎふ女性防災士会・伊藤三枝子会長の言葉（3/3 岐阜新聞より）

七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③9 —

「原発事故やコロナ禍など大きな困難に見舞われている時期に、社会的偏見が生まれてくることに対し、われわれは『寛容』という概念を、特に学ばなければならないのではないかと考えます」－科学史家・科学哲学者 村上陽一郎氏の言葉。（3/3 中日新聞より）

「僕の歌作りは体験で得た実感が大事。この年になると新しい体験はそうないが、世界が同時に悩み、苦しむコロナ禍は心の深いところに届いたのかな」－23年ぶりに書き下ろしアルバムを出した「フォークの神様」、岡林信康氏の言葉（3/4 中日新聞より）

「災害は避けられないからといって、身を任せるわけにはいきません。人間はもがかなくてもはいけません。生きることは、もがくことです」－作家 中村文則氏の言葉（3/4 中日新聞より）

「今日は歌う日、今日は演じる日といった中に、僕の場合は書く日がある」－『オルタネート』で第42回吉川英治文学新人賞を受賞したアイドルグループ『NEWS』・加藤シゲアキ氏の言葉（3/5 岐阜新聞より）

「ゴジラが死ぬラストを試写室で初めて見た時、号泣しました。彼も水爆の被害者なんです」－ゴジラシリーズの映画6本に出演した俳優・宝田明氏の言葉（3/7 岐阜新聞より）

「自分にとって不都合なものを敵としてとらえ、排除の論理が横行していく。この優しさのない行為から生まれるものは、対立と分断がすすむ荒廃した社会である」－哲学者 内山節氏の言葉（3/7 中日新聞より）

「(学生には) いろんなことに興味を持ち、客観的に判断して行動できる冷静なミーハーになってほしい」-3月末で岐阜大学を退職する前澤重禮応用生物科学部教授の言葉 (2/13 岐阜新聞より)

「年はとっても『僕は僕だよ』というプレーをもう一回披露したい」-関市を拠点に活動する東海社会人リーグ2部のFC Bomboneraに加入、現役復帰した元FC岐阜・片桐淳至氏の言葉 (2/14 岐阜新聞より)

「日本海溝はもともと地震活動が盛んで、大震災以降はさらに活発な状態が続いていることに改めて目を向けてほしい」-地震予知連絡会長・山岡耕春名古屋大学教授の言葉 (2/16 岐阜新聞より)



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③⑧ —



「どこかが自費検査をやらないと。医療機関として悔いを残したくない」-アメリカの検査機器を独自で導入し、新型コロナウイルスの自費検査を行う岐阜市の白木耳鼻科クリニック 白木直也医師の言葉 (2/16 中日新聞より)

「一月下旬にはコロナで入院していた女性が出産し、母子ともに無事退院しました。医師になって良かったと感動する場面にも立ち会えています」-藤田医科大病院救命救急センター長 岩田充永医師の言葉。(2/17 中日新聞より)

「人を知ることがコーチとしての哲学の大部分になる。多く学んで、選手を成長させたい」-レッドソックス傘下のマイナーでプロ球界初の黒人女性コーチとなったビアンカ・スミス氏の言葉。(2/18 中日新聞より)

「海では思いがけないことが起こる。それをなんとかするのも楽しみのうち」-最高峰とされるヨット世界一周レース『バンデ・グローブ』にアジア勢でただ一人参加・初完走した白石康次郎氏の言葉 (2/18 岐阜新聞より)

「危機は誰の目にも明らかになっている。今までのやり方を見直し、別の社会を構築する機会といえる。タイムリミットは迫っているが、今行動を起こせば最悪の事態は止められるはず」-大阪市立大学 斎藤幸平准教授の言葉 (2/20 岐阜新聞より)

「スキー場が勢いを失えば、高鷲全体の経済が悪化して雇用に影響が出る。関係者は費用と手間をかけて感染防止対策を充実させている。お客さんにはルールを守り、スキーやスノーボードを楽しんでほしい」-高鷲観光協会 山畑光知哲理事長の言葉 (2/21 中日新聞より)

——今週、心に響いた言葉たち (38) 2021.3.8

「まだ泳ぎ始めて1年たっていない状況で、自己ベストからコンマ何秒の世界に戻ってこられたのは、ものすごくうれしい」－病から復帰して4戦目・ジャパンオープン女子50メートル自由形で2位となった池江璃花子選手の言葉（12/8 中日新聞より）

「医師がいるといっても病院とは違う。設備もマンパワーも足りない施設が実質入院病床になった。できることはみんな一生懸命やったが、亡くなられた方に申し訳ない」－病床逼迫のあおりを受け、感染者の施設内療養を余儀なくされた介護老人保健施設『豊寿苑』の塚原立志ゼネラルマネージャーの言葉（2/7 岐阜新聞より）

「職場ではありのままの姿を見てもらい、調子が悪いときは横たわって仕事をしている」－パーキンソン病を患う中日新聞生活部 三浦耕喜記者の言葉（2/9 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③⑦ —



「看護師は小さいころからの夢。大変なことを乗り越えてきたし、気持ちは揺るがない」－看護師国家試験に臨む修文大学看護学部4年 堀江彩乃さんの言葉（2/10 中日新聞より）

「事故の責任は自分一人にある。心の中では誤りだと分かっていた。最終的に『謝罪する。申し訳ない』と言わないというもう一つの間違いを犯した」－2001年米ハワイ沖で愛媛県立宇和島水産高校の実習船『えひめ丸』に衝突、9名の死者を出した米原子力潜水艦『グリーンビル』スコット・ワドル艦長の言葉。（2/10 岐阜新聞より）

「後継者を指名する立場にないと思っている。新しい時代に合った人を期待する。短期的には新型コロナワクチンをしっかり進めてほしい。長期的には、子育て支援など重要な『人づくり』を進めてもらいたい」－次の市長選には立候補しない意向を正式に表明した小川敏大垣市長の言葉（12/6 岐阜新聞より）

「一般病床で院内感染が起きる可能性を恐れて搬送先の病院がなかなか見つかりません。迅速な搬送が任務である救急隊員として、大変もどかしいです」－名古屋市救急隊員 須崎康平氏の言葉（2/11 中日新聞より）

「受けた時と、オリンピックと自分の状況が変わってきた。昨年、タイトルを獲得できて、前より将棋に精進していかないといけないという思いがあった。立場の変化が要因の一つ」－東京五輪・パラリンピック聖火ランナーを辞退した藤井聡太二冠の言葉（2/12 岐阜新聞より）

「海のどこかにいる。難しいのは分かっているけれど、わずかな希望を信じている」－東日本大震災で娘が行方不明となっている成田博美さんの言葉。宮城県女川町での海中捜索を見守りながら。（2/12 岐阜新聞より）

「次に羽ばたくためのすべてがギュッと詰まっていて、中学生という夜明け前は一番暗く感じるけど、大人から見ると、実はキラキラしまくっています。絶対、大丈夫です」
—作家 瀬尾まいこ氏の言葉（1/26 岐阜新聞より）

「ドミノ倒しでも、2つだと『倒す』牌と『倒される』牌だけですが、3つになると『倒されると同時に倒す』牌が加わる。この『3』の性質を認識することが物事の理解を深めて本質を理解し、応用する力、つまり新しいことを思いつく創造力につながるのです」
—桜美林大学 芳沢光雄教授の言葉（1/27 中日新聞より）

「挫折と奮起の連続だった。一日も早く地域の人からの期待に応え、信頼される警察官になるよう精いっぱい努力する」
—岐阜県警察学校初任科生卒業式で、10 か月間の学校生活を振り返り誓いを述べた原啓太巡査の言葉（2/2 中日新聞より）

七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③⑥ —

「だから、わたしは学校がとても大好きです。おねがいです。コロナで学校が休みになりませんように。そして、コロナがなくなって、友だちと、大きな声で、力いっぱい遊べますように」
—岐阜市長森東小3年 河合胡桃さんの言葉（2/4 中日新聞より）

「やらないといけないのは、みんな分かっている。勧告を受け入れないなら名前を公表するというのは、あまりに横暴ではないか」
—新型コロナウイルス対応の改正特別措置法と改正感染症法の成立に対する大阪府私立病院協会 生野弘道会長の言葉（2/4 岐阜新聞より）

「これからの人生を薬物依存症で苦しむ人たちと、野球界、特に私自身の原点でもある高校野球にささげたい」
—学生野球の指導者になるために必要な資格回復の研修を受けた清原和博氏の言葉（著書を出版した文藝春秋を通じて）（2/5 岐阜新聞より）

「新型コロナは『見えない災害』だということです。地震や津波が襲えば建物が倒壊し、病院も患者であふれます。コロナは街並みこそ変えませんが大災害と同じく人々の命を脅かし、医療を逼迫させます」
—名古屋市コロナ対策室主査 水貝佳代子氏の言葉（2/5 中日新聞より）

「私の宝物。飾ってもらい、再び日の目を見ることができて本当にうれしい」
—大垣市旧庁舎玄関から取り外され、新庁舎の玄関と受付に再び設置される市章モニュメント製作者 尾本正勝氏の言葉（2/6 岐阜新聞より）

「信じられないくらいうれしい。できることを積み重ねた結果だと思う」
—第49回ローザンヌ国際バレエコンクールで5位に入賞した淵山隼平さんの言葉（2/8 岐阜新聞より）

——今週、心に響いた言葉たち (36) 2021.2.19

「世界も私たちも不完全で矛盾だらけです。しかし、理路整然と説明できる世界が本当に豊かでしょうか。いま文化の担い手に求められるのは、余白の豊かさを表現することかもしれません」－俳優 松重豊氏の言葉（1/3 中日新聞より）

「私もタイミングが悪ければ、車椅子で飛び込んでいたかもしれない。でも、私は生きている。死を望んだのに、今は生きるのが楽しいんです。死を望んでも、人は変わるんです」－自身が筋萎縮性側索硬化症患者である太田守武医師の言葉（1/4 岐阜新聞より）

「声を上げられない人間こそ、救われないといけない」－エイズウイルス陽性のシングルマザーらを支援する非政府組織『PLAS』 門田瑠衣子代表理の言葉（1/6 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③⑤ —



「選手の中には自分の望みが 100%通らないとやる気をなくす人がいますが、私は 50～60%通ればいいという気持ちでいます」－パラリンピック競泳・鈴木孝幸選手の言葉（1/9 中日新聞より）

「ウイルスは人や動物を宿主として生きるが、言い換えれば、人は常にウイルスと共存してきた。のみならず、人間は各種の細菌とも共存してきた。この共存のバランスが崩れると人間の身体もダメージを受ける」－京都大学 佐伯啓思名誉教授の言葉（1/9 岐阜新聞より）

「ひさしさんは徹底して『ことば』の人でした」「何事も『ことば』でこそ解決できる、『ことば』でしか解決しない、という信念で生きていました」－作家・劇作家の故井上ひさし氏の妻 井上ユリ氏の言葉（1/10 中日新聞より）

「学問とは食うこと、つまり生きることとは何かを考えることであり、大学とは食うことを心配しないでその問いを持つことができ、果ての果てまで考え、対話するところです。どんな専門であろうがそれは入り口でしかなく、最終的に行き着くところ、自分自身の存在について考えることです」－京都大学 宮原公樹准教授の言葉（1/11 中日新聞より）

「もう慣れていくしかない。いい結果を出して喜んでいただきたい」－全球団、無観客でキャンプを行う決定に対する中日ドラゴンズ・与田剛監督の言葉（1/21 中日新聞より）

「脱毛は、自分の命のためにできる限りのことをした証し。それを楽しむことで、私の世界も大きく広がったと感じています」－38歳で子宮頸がんを診断され、1年で4度の手術を経験した写真家・文筆家 木口マリ氏の言葉（1/25 岐阜新聞より）

「枕ことばのように女人禁制と言われるけど、ずっと前から蔵では女性も働いていた。酒造りは公平に技術で評価される」－英 BBC 放送が発表する『今年の 100 人の女性』に選ばれた女性杜氏・今田美穂氏の言葉（12/21 岐阜新聞より）

「個人の多様性を認める流れは変わらず、みんな同じだという『世間』はほころんでいきます。価値観が多様化しているのに、コロナ禍を機にパチンコや夜の街といった分かりやすい『仮想敵』をつくって一つにまとまろうとする。もうそんな時代ではありません」－新著『同調圧力』が話題の作家・演出家 鴻上尚史氏の言葉（12/24 岐阜新聞より）

「一つ選ぶなら多治見市の虎渓山永保寺。池に橋が架かり、こけむした庭園に光が差す、あの雰囲気素晴らしい」－セルビア共和国出身のセラミックアーティスト ヨバナ・チャボロビッチ氏の言葉（12/27 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③④ —

「暴れる人は未来の自分に見えるんです。暴れる理由があるのに理解してもらえなければ、誰だって絶望しませんか」－約 20 年前、当時は例のない認知症専門の訪問診療を都内で始めた木之下徹医師の言葉（12/28 岐阜新聞より）

「ややこしい。面倒くさい。いとおしい。相手に抱く感情の種類が多いのが家族なんだな。母の死を経て、今はそう思います」－脚本家・映画監督 山田佳奈氏の言葉（12/27 中日新聞より）

「今起きているのは、何が人生で本当に必要なのかを考え直す価値観の再構築。『嗜好品』でもある文化活動は、大きな目のふるいにかけている」－名古屋市にある老舗ライブハウス『エレクトリックレディランド』 平野茂平会長の言葉（12/28 中日新聞より）

「どうして私の服は普通の人々に着てもらうことができないのか。金持ちでない女性はエレガントに着飾る資格はないのか」－12 月 29 日に逝去したフランスの服飾デザイナー ピエール・カルダン氏の言葉（12/30 中日新聞より）

「直接会うということには、当の用事以外にもたくさんの意味がある。相手の表情を見たり、においを感じたり。ある医者が言っていたが、リモート診療なんてとんでもない。病気の『におい』がしないから、と。病気のにおいというものがあるらしい」－俳人 宇多喜代子氏の言葉（1/1 岐阜新聞より）

「使命感でやっているがゴールが見えない。限界が来ている」－新型コロナウイルスの重症患者を受け入れている近畿大病院 東田有智病院長の言葉（12/10 岐阜新聞より）

「今の企業は常務以上の地位の人たちが分担して経営する。専務、常務は決まったことしかない」－事業承継学会 横澤利昌代表理事の言葉（12/11 中日新聞より）

「16歳で日本に来て、相撲のおかげでここまでやって来られた。相撲協会に恩返しできるようにと思ったから、そういう決断に至った」－日本国籍を取得した横綱鶴竜の言葉（12/11 岐阜新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③③ —

「人が一生かかって飲む酒を三人分は飲んだかな」－12月7日肝細胞がんのため死去したコメディアン・俳優の小松政夫氏の言葉（12/12 中日新聞より）

「父と母の人生を合わせて自分なりに感じたことを伝えるために、演劇という道具を使わせていただいているのが僕なんです。こんなにいろんな人が生きて。だからいいよね、おもしろいよね。人間っていとおしいよね、と」－演出家 宮本亞門氏の言葉（12/13 中日新聞より）

「このご時世、アスリートだけが五輪をやりたいといっても、ただのわがまま。国民の声をしっかり聞いた上で、私たちは発信しないといけない」－陸上女子1万円の東京五輪代表に内定した新谷仁美選手の言葉（12/17 中日新聞より）

「この時間帯で、政治、経済、生活情報をしっかり伝えていくのが私の仕事。この分野の番組をやらなくなった時は仕事を辞める時だと思っています」－『羽鳥慎一モーニングショー』キャスター・羽鳥慎一氏の言葉（12/17 岐阜新聞より）

「外国にルーツを持つ子どもが学校や地域にいることは、多様性を学ぶ機会が増えるということ。異なる文化や考え方を教えてくれるだけでなく、困難を乗り越えてきた存在として、激動の時代に他の子どもたちに生きる力を教えてくれるはずです」－文京学院大学 甲斐田万智子教授の言葉（12/18 岐阜新聞より）

「相手を怖いと思ったことはない。話してみると大体みんな普通の人」－岐阜保護観察所 小竹藍保護観察官の言葉（12/20 岐阜新聞より）

「はやぶさ 2 は最先端技術が集まった塊のようなもの。次々と任務をこなし、壊れずに戻ってくるのが誇らしい」－探査機『はやぶさ 2』のベアリング開発に携わった NTN の航空宇宙技術部・後藤貴司氏の言葉（12/3 中日新聞より）

「相生座は文化財にはしない。自分たちで活用し続けることで、舞台を生かしていきたい」－第 42 回サントリー地域文化賞を受賞した瑞浪市の美濃歌舞伎博物館相生座 小栗幸江館長の言葉（12/3 岐阜新聞より）

「患者の顔に感謝の気持ちが表れている。間近で見られる僕たちは役得だね」－非政府組織『ペシャワール会』現地代表の医師・故 中村哲氏の言葉（12/4 岐阜新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③② —

「自分はまだ振ったらどこに飛ぶかという段階。何かを聞いて、見て、盗んで、足りないことだらけなのでたくさん吸収したい」－中日ドラゴンズ 根尾昂内野手の言葉（12/4 中日新聞より）

「ジョブ型の発想は男女間の不均衡をなくすなど格差の解消につながる側面はある。ただ、長時間労働や解雇など、労使間で話し合っただけで規制を設けることが不可欠」－若者の労働相談を行う NPO 法人『POSSE』今野晴貴代表の言葉（12/6 中日新聞より）

「稽古で同じようにできなくても悩んだり腐ったりしない。諦めないで、じゃあ私ならこうしよう考える」－平成生まれの子たちと同じ舞台に立つ 71 歳の世界的バレリーナ 森下洋子氏の言葉（12/6 岐阜新聞より）

「防災減災が専門的に研究されるようになってきました。その流れは良いことですが、専門性が高まれば『特別な人たちがやるもの』になる。それはすごく危ない。」－おらが大槌夢広場 神谷未生代表理事の言葉（12/7 中日新聞より）

「世界一を目指しているので、どんな状況でも負けたくなかった。去年より強くなっている」－競泳日本選手権男子 200 メートル平泳ぎで 2 連覇を果たした渡辺一平選手の言葉（12/7 岐阜新聞より）

「知っている人にも配った。国家の仕事だったからやるしかない。本人や親兄弟は私個人のことを好きとか嫌いとか関係なく、私を見るのがつらかったと思う」－太平洋戦争時、村役場の職員として召集令状を配達していた吉田寿太郎氏の言葉（12/8 岐阜新聞より）

「今は各国に難民がいる。原発事故の避難者の中に『難民のようだ』と話す人もいた。居場所のない者の物語として読まれたのではないか」－『JR 上野駅公園口』で全米図書賞（翻訳文学部門）を受賞した作家・柳美里氏の言葉（11/20 岐阜新聞・中日新聞より）

「画面越しとは違って、読み語りとは人と人との対面。そのときの呼吸や声色、目の動きが子どもを引きつける。だから生の声を大切にしたい」－実践童話の会 外山澤子代表の言葉（11/21 中日新聞より）

「現代が小説で恋愛を書きにくい時代だと言われるのは、人間関係がすごく難しいと感じるようになってきているから。わたしたちの現代とは違う文化を知ることで、狭いところからふわっと外に出たような気持ちになってもらえたら」－『伊勢物語』をモチーフにした小説『三度目の恋』を出版した作家 川上弘美氏の言葉（11/22 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③① —

「外出時に誰かが後ろにいるという、普通の人には何でもないことでも、私にとっては殺されるかもしれないという恐怖を想起させ、あの日に戻ったような感覚になる」－2016年に東京都小金井市で起きた殺人未遂事件の被害者・富田真由さんの言葉（11/23 岐阜新聞より）

「目標は達成できたけど、やっぱり悔しいです」－大相撲 11 月場所千秋楽で、大関貴景勝との優勝決定戦に敗れた小結照ノ富士の言葉（11/23 中日新聞より）

「作り手の作為、過剰な美化や偏見を助長したものも多い。そうじゃないものを作りたいかった」－アイヌ文化を題材にした劇映画『アイヌモシリ』の監督・福永壮志氏の言葉（11/26 中日新聞より）

「半世紀の歳月が流れ、世相もすっかり変貌したかに見えるが、事件は風化しているのではなく、深化しているのではないのでしょうか」－三島由紀夫と共に割腹自殺した『楯の会』メンバー森田必勝の兄・治氏の言葉（11/26 中日新聞より）

「肉体、装い、振る舞い、指向など性を振り分ける要素はさまざまだが、実はあいまいなもの」－岐阜市出身の女装パフォーマー・ブルボンヌ氏の言葉（11/27 岐阜新聞より）

「京都や東京はあくまで勝負の場。岐阜の空気は優しく、心地良い。これからもここから作品を、そして日本画の魅力を発信していきたい」－可児市在住の日本画家・宮原剛氏の言葉（11/28 岐阜新聞より）

「副大統領になる女性は私が初めてかもしれないが、最後にはならない」ーアメリカ副大統領に就任する運びとなったカマラ・ハリス上院議員の言葉（11/10 岐阜新聞より）

「宇宙旅行は挑戦の歴史だ。新しい可能性を見つけ、明日への希望になりたい」ー米スペース X の新型宇宙船クルードラゴンに 14 日搭乗予定の野口聡一氏の言葉（11/11 岐阜新聞より）

「かみさんのどこが好きかって？ ぼくのことを好きだっていうところでしょうね。ぼくなにか、ホントどうしようもないやつです。なのに、かみさんは自分のことのようにぼくのことを心配したり喜んだりするから」ー俳優 村井国夫の言葉（11/15 中日新聞より）

七コロナ八起き

ー 今週、心に響いた言葉たち ③⑩ ー

「俺たちがアユをとらんかったら、放流できる数も減ってアユもいなくなってしまう。天然アユも食べられなくなる」「元に戻すのは無理だが、今の状態は何とか維持していきたい。河口堰とは共存してやっていくしかない」ー伝統漁法「瀬張網漁」^{せはりあみりょう}でアユを取る漁師・服部修氏の言葉（11/17 岐阜新聞より）

「被害者支援はどれだけやったら終わり、というものではない。被害者は気持ちの変動が激しくなりがち。こちらが惑わない心構えも必要で難しい」ー全国被害者支援ネットワークから栄誉章を受けたぎふ犯罪被害者支援センターの古田孝子相談員の言葉（11/17 中日新聞より）

「登録を申請した時は士気が上がったが、無理だと思っていた。ありがたいし、誇りに思う。世界に日本建築が広がる可能性もある」ー国連教育科学文化機関（ユネスコ）から「伝統建築工匠の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」を無形文化遺産に登録するよう勧告されたことを受けた全国文化財壁技術保存会・中嶋正雄副会長の言葉（11/6 中日新聞より）

「コロナ対応は PCR 検査や解熱剤の処方ぐらいで、膨らむ一方の出費に見合う診療報酬が入らない。やればやるほど赤字になってしまう」ー宇都宮市にあるインターパーク倉持呼吸器内科・倉持仁院長の言葉（11/19 中日新聞より）

「淡墨桜は根尾の宝。（折れた枝も）新しい形に生まれ変わってほしいとの思いを込めた。製品に触れることで淡墨桜の良さが伝われば」ー2018 年の台風 21 号によって折れた国の天然記念物『淡墨桜』の枝を使い、計 150 個の箸と髪飾りをつくった根尾中学校 3 年生・林実花さんの言葉（11/19 岐阜新聞より）

——今週、心に響いた言葉たち（30）2020.11.24

「終わりを決めていたからこそ、この5年頑張れた。(迷いは)1ミリたりともなかった」
—今季限りでの現役引退を表明したJ1川崎の元日本代表MF 中村憲剛選手の言葉 (11/2 岐阜新聞より)

「人の心までもが侵される事が、最も恐れるべき事。我々の仕事を通して少しでも安らぎに繋がる様、愚直に生きて参りたい」—紫綬褒章を受章した俳優 中井貴一氏の言葉 (11/2 岐阜新聞より)

「僕が頑張ることで、自分も頑張れると言ってくれる方がたくさんいる。そういう影響を与えられる間は頑張る」—肋骨を取り除くというリスクを伴った手術を受けてでも現役にこだわる58歳のアーチェリー選手 山本博氏の言葉 (11/5 中日新聞より)

七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑳ —

「幸せな15年間だった。てっぺんも底辺も両方見られたことはこれからの人生にすごく生きると思う」—今季限りで現役を引退する中日ドラゴンズの吉見一起投手の言葉 (11/6 中日新聞より)

「泉質を見極めて行き先を選ぶ人が増えている。泉質や効果を積極的に開示して、客に選ばれる努力が必要だ。温泉は地球の恵み。天然で湧くお宝だ。有限の資源を生かさなければもったいない」—杏林大学外国語学部 小堀貴亮介教授 (観光地理学) の言葉 (11/6 中日新聞より)

「ネパールの魅力は人の温かさと、歴史ある建造物がたたずむ美しい街並み」—登山や文化芸術活動を通じてネパールと交流するNPO法人『松本ヒマラヤ友好会』 鈴木雅則理事長の言葉 (11/6 中日新聞より)

「地層の前では道具や経験の差はない。誰にでも大発見のチャンスがある」—瑞浪市の1800万年前の新生代の地層から「^{ききやくるい}鱗脚類」の頭の化石を発掘した瑞浪市化石博物館 安藤佑介学芸員の言葉 (11/7 中日新聞より)

「普通じゃないことを、いかに普通にできるかが大事になってくる。このご時世、大変だとは言ってられない」—国際体操連盟主催の国際競技会に出場する内村航平選手の言葉 (11/8 中日新聞より)

「美術は何を目指すべきかが分散している時代。『自由な美術』についてはずっと考え続けている」—美術家 会田誠氏の言葉 (11/8 中日新聞より)

——今週、心に響いた言葉たち (29) 2020.11.16

「幾度も言おう。便利はいい。それは否定しない。しかし、大きな疑問が立ちはだかる。便利とは、独りで何もかもできるようになることなのか…。そうだとしたら、人と人を引き離して、孤独にしてしまうのではなからうか、と。」—東海テレビ 阿武野勝彦ゼネラルプロデューサーの言葉（10/22 中日新聞より）

「あんなに抱っこが好きだった子はいないんじゃないかな。一番思い出が詰まっているのは、僕たち両親の手かもしれない」—医療事故で2歳の子どもを亡くした両親の言葉（10/22 岐阜新聞より）

「誹謗中傷を受けた人だけでなく、友達や家族など周囲の人が傷ついている現実を分かってもらいたい」—SNSでの誹謗中傷を苦に自ら命を絶った女子プロレスラー・木村花さんの母 響子さんの言葉（10/24 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑳ —

「杉原（千畝）氏は今も日本とリトアニアの架け橋だ。私も外交官として多くのことを彼から学んだ」—リトアニアのゲディミナス・バルブオリス駐日大使の言葉（10/23 岐阜新聞より）

「本能寺の変から400年以上が経っている。何とか（明智光秀）を日の当たる場所に出したかった」—可児市史跡明智城址保存会 林則夫会長の言葉（10/25 岐阜新聞より）

「研究者としては出遅れましたが、無駄な時間だったとは思いません。文系、理系を問わず、幅広い視野を取れるようになったのではと」—『とうがらしの世界』を出版した信州大学 松島憲一准教授の言葉（10/22 中日新聞より）

「漫才は昔、次の芸人が出るまでお客さんを退屈させないための『つなぎ』の芸だった。裾野が広がり、こうして選ばれ、本当にうれしい」—2020年文功労者に選ばれた漫才師 西川きよし氏の言葉（10/28 中日新聞・岐阜新聞より）

「倫理や道徳で歯止めをかけなければ、科学が思いも寄らない悪意の道具になることをわれわれは知るべきだろう。人間は唯一、同じ過ちを犯す生き物であることを歴史が証明している」—政界引退を発表した「世界で一番貧しい大統領」ホセ・ムヒカ南米ウルグアイ元大統領の言葉（10/28 中日新聞より）

「移動もスケジュールもきつい時は、先を見据えたら気持ちがなえる。終わったらまた次の日、と強い気持ちを持ってやるのが、最終的に勝ちにつながる」—3年ぶりのリーグ優勝を果たしたソフトバンク・工藤公康監督の言葉（10/28 岐阜新聞より）

「客が入るイコール元通り、というわけではありません。音楽界全体がうまく回り、新しい可能性をどう見いだすか。単なる娯楽ではなく、社会と共にあるものというような意識につながればと思います」—京都大学人文科学研究所教授・音楽学者 岡田暁生氏の言葉（10/17 中日新聞より）

「乗客の減少や間引き運転で打撃を受けたのに、雇用調整助成金をもらえないケースもある。公共性を背負わされているのに、経営難は自分で乗り切れと矛盾を押しつけられている」—関西大学 宇都宮浄人教授（交通経済学）の言葉（10/17 中日新聞より）

「すごく幸せな時間だった。真っ赤なファンのみなさんが選手に勇気と力を与えてくれていた」—岐阜商高—東北福祉大から2002年に広島カープに入団。今季限りでの現役引退を発表した石原慶幸捕手の言葉（10/17 岐阜新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑳ —

「安全性と効果を3段階で確かめる現在のワクチンの承認プロセスは、多くの失敗の反省を踏まえてつくられた。開発を急ぐのはいいが、手続きを省略するのは許されない」—長崎大学熱帯医学研究所 山本太郎教授の言葉（10/19 岐阜新聞より）

「国内でシェアを奪い合っても未来はない。海外で量を普及できれば、ブランド価値が上がり、業界も活性化する」—持ち運べる量を製造、フランスで販売している量材メーカー社長 三谷原恒良氏の言葉（10/19 岐阜新聞より）

「球団には選手の健康を守る義務があり、感染を防げなかったのは落ち度だと言えるが、辞任や制裁金に合理性があるかは非常に疑問だ」—新型コロナの感染者が相次いだことを受け球団社長が引責辞任。関係選手らには制裁金を科した阪神の対応に対する中野明安弁護士の言葉（10/20 朝日新聞より）

「並行して戦った名人戦で失冠し、正直駄目かなと思った。長い目でやってみようと考え方を変えたところ、自分らしく指せた」—将棋の第五期叡王戦七番勝負を制した豊島将之叡王の言葉（10/21 中日新聞より）

「勝てば幕内に上がる。自分の中で可能性を感じるからやっている。やり残しなく、納得して終わりたい」—11月場所、十両転落が確実となっている36歳・関取最年長 琴奨菊の言葉（10/21 中日新聞より）

「基本を守りつつ、祭りがこの町のためにどうあるべきか考えなおす機会を与えられたのかもしれない」－高山屋台保存会 寺地亮平理事の言葉（10/9 岐阜新聞より）

「野宿者にはアルコールやギャンブルの依存症になっているケースも多いが、話を聞いて心身のバランスを崩し、人生をこじらせてしまった。誰もが野宿者になり得る」－ことぶき共同診療所 越智祥太医師の言葉（10/7 中日新聞より）

「作品には聴く人それぞれに好きなのところがあって、自分がこういうふうに作ったと言うのはおこがましい」－10月7日に亡くなった作曲家 筒美京平氏の言葉（10/13 中日新聞より）



七コロナハ起き

－ 今週、心に響いた言葉たち ②⑥ －

「新聞販売店という商売柄、行政の目が届きにくい周縁地域の実態が分かる。せめて、自分の新聞配達エリアだけでも暮らしやすくしたい」－日本新聞協会「地域貢献賞」に選ばれた中日新聞三河大野販売店店主・NPO法人「のんほい・ほうらい」代表 鈴木芳則氏の言葉（10/14 中日新聞より）

「新聞で身に付けた知識を読書によって組織化して、教養にまで高める。この段階を踏むことで、初めて大局観が生まれてくる。そして大局観がなければ適切な選択はできない」－お茶の水女子大学名誉教授・数学者 藤原正彦氏の言葉（10/14 岐阜新聞・中日新聞より）

「テレビのバラエティーはテンポが速いし、分かりやすくなければいけない。文章の世界は細かく論理を付けていけば、時に正論じゃなくても筋が通る」－『表参道のセレブ犬とカバーニャ^{ようさい}要塞の野良犬』で第3回斎藤茂太賞を受賞したお笑いコンビ・オードリー 若林正恭氏の言葉（10/15 中日新聞より）

「東京には千葉や岩手のタコが多い。ただ明石ダコの苦境は聞いている。心配だ。天然ブリもアワビもウニも同じ状況。漁業界は今、大変な打撃を受けている。国にはそれが全く伝わっていない」－豊洲市場の水産仲卸^{やまはる}「山治」山崎康弘社長の言葉（10/15 中日新聞より）

「役割や責任があれば、子どもたちは真正面から取り組んでくれる。何年かかるかわからないが、挑戦を応援したい」－本巣市内に「お山のおうち」を開設するフリースクール「人と学ぶ場ふらっと」加藤隆史代表の言葉（10/15 岐阜新聞より）

「期せずして満足度の高さが実証された形。ただ、これに客が慣れてしまえば、もう元には戻れない」－今季、乗船客数を制限し食事や飲食を禁止した長良川鵜飼。鵜飼観覧船事務所 林素生所長の言葉（10/15 岐阜新聞より）

「対策は徹底的にやった。コロナは恐ろしいと改めて感じた」－松本尚樹ロッテ球団本部長の言葉（10/7 岐阜新聞より）

「野宿者にはアルコールやギャンブルの依存症になっているケースも多いが、話を聞いていると、元々は家族もいて会社勤めをしていた人たちだと分かる。ちょっとしたことで心身のバランスを崩し、人生をこじらせてしまった。誰もが野宿者になり得る」－ことぶき共同診療所 越智祥太医師の言葉（10/7 中日新聞より）

「僕はロックスターなんかじゃない。ロックが好きだから演奏する」－10月6日喉頭がんにより死去したロックバンド『ヴァン・ヘイレン』のギタリスト エディ・ヴァン・ヘイレン氏の言葉（10/8 中日新聞より）



七コロナ八起き

－ 今週、心に響いた言葉たち ②⑤ －

「生きることがつらいのは間違いない。どんなことでもいい、『もやもやしている』というだけでもまずは話してほしい」－早稲田大学 上田路子教授の言葉（10/8 中日新聞より）

「これまで音楽家たちは『自分たちは音楽家なんだから、聴きたい人が来たらいい』というスタンスだった。そうではなく、コロナ前にはもう戻れないので、聴きたい方々と接点を持ち、やれることは全部やらないとって思うんです」－中部フィルハーモニー交響楽団首席客演指揮者に就任した飯森範親氏の言葉（10/8 中日新聞より）

「（核兵器禁止）条約参加を決断する首相は、真の核軍縮をもたらしたとして歴史に名を残すだろう」－2017年ノーベル平和賞を受賞した非政府組織（NGO）核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）のベアトリス・フィン事務局長の言葉（10/8 岐阜新聞より）

「喜んでくれるお客さんが多かった。静かに見る鵜飼いも一つの選択肢になると感じた」－長良川鵜飼船頭 笠井潤氏の言葉（10/9 岐阜新聞より）

「あってはならないが、従業員も私も何かの拍子で再び犯罪に手を出してしまうなど、再犯の恐怖とは一生隣り合わせ。皆で力を合わせる仕組みがあったらいい」－更生を目指す刑務所や少年院出所者が大勢就職している建設会社・大伸ワークサポート 広瀬伸恵社長の言葉（10/9 中日新聞より）

「器具が売っていないので、作ることが研究テーマになることもある。自分たちで新しい物を作り、動くだけでもうれしい」－優れた女性科学者に贈られる猿橋賞を受賞した市川温子京都大学准教授の言葉（10/9 中日新聞より）

「大会は自分との勝負。1年延期になった分練習できるので、いい結果を出せると思う」
—自転車BMXフリースタイル・パーク男子 中村輪夢選手の言葉 (9/26 中日新聞より)

「身近な人とわかり合えるのが方言。いわば『情』の言葉なんです。聞くとなんかほっこりしますよね」—岐阜大学教育学部 山田敏弘教授の言葉 (9/15 中日新聞より)

「人と人が近づきにくいからこそ、近づくことの喜びや意義を見いだすのも演劇の役割では」—京都で演劇ユニット『下鴨車窓』を主宰する田辺剛氏の言葉 (9/26 中日新聞より)



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ②④ —

「柔道着を着なくても普段の生活の中で社会に貢献する。助け合う心を持ち、他者の役に立てる自分でありたい。それが柔道家の精神なのだ」—バルセロナ五輪柔道男子71kg級金メダリスト 古賀稔彦氏の言葉 (9/28 中日新聞より)

「どぶろくの醸造には多くの人の協力があり、飲むのを楽しみに待つ人がたくさんいる。だからこそ処分は苦渋の選択だった」—どぶろく祭中止に伴い、大部分のどぶろくを処分する見通しになったことについての白川八幡神社氏子総代長 西村浩昭氏の言葉 (9/28 岐阜新聞より)

「資料の展示だけでなく、復興の道のりを研究し教訓を伝えたい」—東日本大震災・原子力災害伝承館 初代館長に就任した医師 高村昇氏の言葉 (9/29 岐阜新聞より)

「当たり前なことが当たり前でないと、全てのことに感謝できている」—テニスの全仏オープン女子シングルスで初の初戦突破を果たした日比野菜緒選手の言葉 (9/24 岐阜新聞より)

「もしあなたの家族や孫がいじめに遭い、苦しい毎日を過ごしているとしたら、と思いき起こして答弁してほしい」—岐阜県議会での尾藤義昭議員の言葉 (10/1 中日新聞より)

「そもそも学校は、この市民社会を共につくり合う『市民』を育む場所である。とすれば、学校もまた、子どもたちと教師が共につくり合うものでなければならない。少なくとも、子どもたちにはその経験が十分に保障されている必要がある」—教育哲学者 菅野一徳氏の言葉 (10/1 中日新聞より)

「お客さまがいるだけで、演技に何かが返ってくる感じがするんですね」—歌舞伎役者 尾上菊之助氏の言葉 (10/1 中日新聞より)

「今後は自分の様子を見ながら。でも今は勝負の神様が自分を見捨てている」—今年一年、1970年のプロデビュー以来初めて試合出場をしないことを明らかにしたゴルファー・尾崎将司氏の言葉（9/17 中日新聞より）

「『コロナは怖いけれど、がんは国民の半分がかかる』という事実を忘れずに、適切な診断、適切ながん治療をうけてもらいたいですね」—岐阜大学病院 吉田和弘院長の言葉（9/17 岐阜新聞より）

「ちょっとでも覚えていてもらいたい。動いて相手を翻弄していく」—新入幕で4連勝の力士・翔猿の言葉（9/17 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑳ —



「イラク取材で装甲車両に乗った際は、確かに怖かった。だが、それより恐ろしいのは、万一自分が人質になった場合の日本社会の猛烈な非難だ。家族も巻き込まれる」—アジアプレス・インターナショナル ジャーナリスト 綿井健陽氏の言葉（9/20 岐阜新聞より）

「姉との思い出は少ないけど、今でも大好き。姉がもし読んでくれたら『ありがとう、頑張ったね』と褒めてくれると思う」—東日本大震災で犠牲になった姉をモチーフに短編小説『真っ白な花のように』を書いた宮城県石巻市の中学1年生・佐藤珠莉さんの言葉（9/23 岐阜新聞より）

「100 ㎞走や 400 ㎞走ではなく、マラソンを走っているようにパンデミックと向き合わなくてはならない」—国際保健学者・山本太郎氏の言葉（9/23 岐阜新聞より）

「生まれ変わってもこの体で生まれたい。人と比較するものがないから自由にいられる」—両腕のないアーチェリー選手 マット・スタッツマン氏の言葉（9/24 岐阜新聞より）

「発見は、技術的な発見、芸術的な発見など多岐にわたる。古代エジプトに関する新たな知見を数多く紹介することで、美しい物質文化の側面だけでなく、エジプト学が発見の歴史であると知ってほしい」—ライデン国立古代博物館 ウィム・ウェイランド館長の言葉（9/24 中日新聞より）

「（自宅で過ごす）『ステイホーム』でごみが増えたことは知らなかった。使えるものはリサイクルする」—「With コロナ教科学習会」で家庭ごみとコロナの関係を学んだ高富中学2年 末林大輝さんの言葉（9/24 中日新聞より）

「かつて猛威を振るった天然痘は、今年で根絶 40 年。人類が闘いに勝利した唯一の感染症です。日本でも 1975 年以降、患者は出ていません。成功したのは、地球規模の協力があつたから。感染症対策の最大の敵は、今も昔も『自国主義』です」－元国立感染症研究所室長 加藤茂孝氏の言葉 (9/11 岐阜新聞より)

「多くの人々が不平不満を民意として表出させることの問題は、本当に困っている人の声がかえにくくなることです」－東京工業大学 西田亮介准教授の言葉 (9/13 岐阜新聞より)

「コロナ禍では、仕事などさまざまな要因で喪失を感じることがあり得る。『ここに来たらほっとした』という場を提供していきたい」－『寺子屋シネマ』主催 川瀬富士美氏の言葉 (9/13 岐阜新聞より)



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ②② —



「社会に分かりやすい規範があるとき個人はどう生きるべきか。新型コロナウイルス禍前は社会と個人の対立は目に見えなかったが、戦時下の日本が舞台ならばはっきり描くことができると思った」－『スパイの妻』で第 77 回ベネチア国際映画祭監督賞（銀獅子賞）を受賞した黒沢清氏の言葉 (9/15 中日新聞より)

「都市化すると、どこの地域も同じになって面白くなくなってしまう。スタートアップ・エコシステム（拠点都市に選定されたこと）は、何か突拍子もない人がたくさんいて、突拍子もないことをやっている、ということが生まれる一つのきっかけになる」－名古屋大学 佐宗章弘副学長の言葉 (9/15 中日新聞より)

「コロナ収束を徹底的に行っていく。総裁に就任したのだから仕事をしたい」－自民党第 26 代総裁に選出された菅義偉氏の言葉 (9/15 中日新聞より)

「彼らから受け継いだ血が体中を巡り、負けるわけにはいかないと思わせてくれた」－テニスの全米オープン女子シングルスで優勝した大坂なおみ選手の言葉 (9/15 中日新聞より)

「カフェ営業を通じて、障害者を腫れ物に触るように扱う日本の空気を変えたい」－愛知県岩倉市で障害者が働く古民家カフェを営む金治弘樹氏の言葉 (9/15 中日新聞より)

「修学旅行を楽しみにしてたけど、みんなと大仏が描けて良い思い出になった。思ったよりも大きくて驚いた」－中止になった修学旅行のかわりに 6 年生全員ではぼ実物大の奈良の大仏 3 体を運動場に描いた三輪南小 大野旭陽君の言葉 (9/16 岐阜新聞より)

「経済を発展させ、医学を展開し、科学を発展させれば、人間は自然の脅威（自然災害など）や感染症の脅威から逃れ、よりより生活が可能だと考えた。だが、この期待は今日、どうやら失望に変わりつつある」－京都大学 佐伯啓思名誉教授の言葉（9/5 岐阜新聞より）

「やっと試合ができる喜びがある。楽しみだし、うれしい」－ソフトボール日本代表 上野由岐子選手の言葉（9/5 岐阜新聞より）

「個々人が自律した存在として互いに関心を抱き、干渉し合う。そんな多様で分厚い社会をどう成り立たせるか。自由や自律とは何か。今こそあらためて考えるべきです」－大阪大学 大竹文雄教授の言葉（9/5 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑳ —



「社会全体が不安や不自由さを抱える中、他者を理解し、サポートする余裕がなくなりつつある。まずは一人一人が自分のケアに集中する。余裕が生まれれば、外に目が向けられるようになる」－静岡大学 香野毅教授の言葉（9/5 岐阜新聞より）

「情報をむやみに受け取るのも禁物。これまでと異なる生活環境に長時間身を置くことで、ボディブローのようにストレスが蓄積してしまう」－パークサイド日比谷クリニック・立川秀樹院長の言葉（9/9 中日新聞より）

「モヤモヤしたままでは物語の良さが伝わらない、役をとことん愛そうと思った」－NHK連続ドラマ『彼女が成仏できない理由』主演 高城れな氏の言葉（9/10 中日新聞より）

「表現の場を保ち続けることが演劇人としての社会的責任だ。市中感染のリスクが少ない地方から文化を再興したい」－劇作家 平田オリザ氏の言葉（9/10 岐阜新聞より）

「伝統技法のさらなる向上と、今織部の進化を両輪にして取り組んでいる。今を生きる証として新しい織部や志野を世に出し続けたい」－県重要無形文化財（織部）保持者の陶芸家 玉置保夫氏の言葉（9/10 岐阜新聞より）

「都市部の大規模な水族館のような目玉はなくてもいい。訪れた人が、豊かな自然や歴史を持つ四国のいろいろな地域に旅をしたくなるような施設にしたい」－6月、香川県宇多津町に開業した四国水族館館長 松沢慶将氏の言葉（9/10 岐阜新聞より）

「コロナ禍からの経済再生を図るため、欧州連合（EU）は、復興基金を創設することで合意した。コロナ禍における世界の対応は、人類の連帯と協調が進んだことの証左と考
えたい」－立命館アジア太平洋大（APU） 出口治明学長の言葉（8/27 中日新聞より）

「さまざまなストレスを、はき出す場がない子どもがいる。『学校、どう？』と聞いてく
れる大人がいるだけでも味方がいると感じられるはずだ」－NPO 法人チャイルドライン支援セ
ンター 高橋弘恵理事の言葉（8/28 岐阜新聞より）

「自分以外の人のために尽くすことを学んだ」－岐阜商高硬式野球部 松村海星マネージャー
の言葉（8/20 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑳ —



「決して体力の限界を感じたわけではないが、自分一人で現役を続けることはできない。
悔いはない」－ボクシングで世界 3 階級を制覇・現役引退を表明した八重樫東氏の言葉（9/2 岐阜新聞
より）

「きょうよりあす幸せになりたい、というのがモットーなので。あすの方がもっといい
日になるかもしれないと思ってやっている」－今季限りで現役を引退する阪神タイガース・藤川
球児投手の言葉（9/2 中日新聞より）

「できれば自分の土地も、中間貯蔵施設にはさせたくなかった。けれども国は住人に対
しての大義名分を作ってくる。『福島のためですから何とかしなければ』と」－東日本大
震災前、梨農園を営んでいた鎌田清衛氏の言葉（9/3 中日新聞より）

「ミュージシャンは、配信の危険性も語っていかないと。リアルなものを伝えづらくな
る」－ロックバンド「スターダスト☆レビュー」ボーカル&ギター 根本要氏の言葉（9/3 中日新聞より）

「子どもたちは天気予報を見て、つばの広い帽子をかぶったり、日傘を差したりと熱中
症対策を自ら考えるようになった。今後も自分で考え判断する力を身に付けてほしい」－
熱中症対策として夏休み明けから行っている「ノーランドセル登下校」を 9 月末まで継続することを決め
た本巣市・川治秀輝教育長の言葉（9/3 岐阜新聞より）

「何が正解かは分からない。感染状況を見ながら、できる対策を徹底するしかない」－埼玉医科大学病院 産婦人科 亀井良政教授の言葉（8/19 岐阜新聞より）

「ライオンキングのテーマは復活や再生。明日から頑張ろうと思える、人の心を助ける作品です」－劇団四季『ライオンキング』でふるさとを追われたライオン「シンバ」を励ますミーアキヤット「ティモン」を演じる深堀拓也氏の言葉（8/20 中日新聞より）

「音楽家は人生全てが音楽につながる。もがいて生きていきたい」－ピアニスト 反田恭平氏の言葉（8/20 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑱ —

「学ぶ場所は『現場』と『本場』がいい。環境問題を学ぶなら、ごみがたまった海を見た方が実感が湧くし、農業を学ぶときは田んぼや畑に、コンピューターサイエンスなら最先端の研究所に行った方が面白い」－連続起業家 孫泰蔵氏の言葉（8/21 岐阜新聞より）

「難しいニュースほど伝える側の姿勢が問われます。大きなニュースであるほど、『自分ごとだ』という要素を盛り込むことが大切」－ジャーナリスト 鎌田靖氏の言葉（8/22 中日新聞より）

「今、自分が取った行動が将来の地球に影響するのです。『十年後にこうありたい』と思う姿から現在を見つめ直し、今、何をしなければいけないのか、過去から未来までの長い時間軸で考え、行動を選択する必要があります」－キャスター 国谷裕子氏の言葉（8/22 中日新聞より）

「次に本業で新しいことにチャレンジするとき、『あのとき、こうだったから、こうしてみよう』と考えることができると思う」－医療用フェースシールドの量産に取り組んだトヨタ自動車元町工場車体部 松井紀子氏の言葉（8/26 中日新聞より）

「核のごみという単語が寿都の枕ことばになれば、どうなるのか。核と観光、水産は共存共栄できない」－原発から出る高レベル放射性廃棄物の最終処分場選定に向けた文献調査に応募を検討している北海道寿都町で水産加工業を営む吉野英寿氏の言葉（8/26 中日新聞より）

「コロナ禍は『不良』でない人にも『当たり前』を疑う哲学の機会を与えてくれたのではないのでしょうか」－花まる学習会 代表 高浜正伸氏の言葉（8/7 岐阜新聞より）

「環境問題は、一つのテーマを単体で捉えるのではなく、温暖化と生物多様性、省エネルギーと新エネルギーなど、さまざまなテーマをつなげていくことが大切。その中で、一人一人にできることが見えてくる」－NPO 法人 e-plus 生涯学習研究所・代表理事 環境カウンセラー 小林由紀子氏の言葉（8/9 岐阜新聞より）

「学校に行く子も、行かない君も、生きているだけで、いいんだよ」－川崎市子ども夢パーク 西野博之所長の言葉（8/9 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑱ —



「地道に毎日の生活をちゃんと続けていくってことが平和だということだろうと思いますね。

基本的にそういう人間の普通の生活を信じて、それを守るといふことしか戦争反対の道はないという気がするんです。

それが、たった一人であってもね」－詩人 谷川俊太郎氏の言葉（8/9 中日新聞より）

「私たちは大きな危険にさらされ続けていること、そして人間の命こそが至上の価値を持つものであることを心に留めましょう」－ノーベル文学賞作家 カズオ・イシグロ氏の言葉（8/10 中日新聞より）

「僕は、今度のコロナでは明確な答案が書けなくてもいいと覚悟しています。もうすぐ90歳になりますし、何もしないで考えているだけでやり過ごして死んじゃうというのも、宇宙の論理から外れることではないのかなと思っています」－映画監督 篠田正浩氏の言葉（8/14 岐阜新聞より）

「答えは目の前にあり自分の目で確かめてほしいということ。ネットですぐに調べられる時代ですが、目の前の虫を調べると、世にあふれる情報と違うなんてことはよくあります」－山口県下関市にある『豊田ホテルの里ミュージアム』学芸員 川野敬介氏の言葉（8/16 中日新聞より）

「一瞬一瞬で世界は変遷するが、自分はただできることをやっていくしかない。いつ起こるか分からない不幸を背負って生きている。苦しみや悲劇にさらされながら。それでも腐ってしまっってはいけない。必死に抵抗しなければ」－画家 佐藤昌宏氏の言葉（7/29 岐阜新聞より）

「平時から、違和感には敏感でいてほしいな。人間ってさ、強い目的を持って生まれてきたわけでもないし、生きながら試行錯誤する生物なんだ。不安定、不安心なんて当たり前だよな。免疫力は体だけじゃなく、精神にも大事なんだって、頭に入れておいてほしいなあ」－絵本作家 五味太郎氏の言葉（7/31 岐阜新聞より）

「違いがあっても議論ができるというのは最低限必要です」－2020年4月に全国最年少女性市長となった徳島市長 内藤佐和子氏の言葉（7/31 岐阜新聞より）

七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑰ —

「可能性のある限り強化を続けることは当然だし、諦めたら終わり」－バレーボール女子日本代表 中田久美監督の言葉（8/1 中日新聞より）

「もしも客観的に地球を眺めている宇宙人がいたら、その眼には、無駄な軍事装備のためにいかに資源やエネルギーの無駄遣いをしているかと映り、地球人はなんと遅れた知性しかないと思うのではないだろうか」－総合研究大学院大 池内了名誉教授の言葉（8/1 中日新聞より）

「現在の世界では、戦争が起きれば核兵器が使われる可能性が高い。一度使われたら核の撃ち合いになり、破滅だ。感染症や気候変動も人類への脅威だが、人間が百パーセント抑えきることはできない。核兵器は人間の手で完全になくすることができる」－非政府組織(NGO)核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)国際運営委員 川崎哲氏の言葉（8/2 中日新聞より）

「本当に強い人とは、拳をふり上げて怒る人ではなく、ひどい目に遭った時、静かにほほえむことができる人」－イラストレーター 田村セツコ氏の言葉（8/2 岐阜新聞より）

「平和と健康がなければスポーツはできない。整えてもらった環境に甘えず、選手自身が感染予防の発信をすることも大事だと思った」－新型コロナウイルスの感染予防策をまとめ、小中高生向けのガイドブックを作成したバレーボール男子日本代表 石川祐希選手の言葉(8/5 中日新聞より)

「ずっとつらい人生はありませんし、ずっと順調な人生もありません。人は順調なときには誰かを支え、つらいときには誰かに支えられます。それが社会の至る所で繰り返されています」－アオバ住宅社 齋藤瞳代表の言葉（7/18 岐阜新聞より）

「周りの配慮や支援で、全ての人が当たり前前に社会参加できる世の中になるよう活動したい」－県ヘルプマーク普及啓発大使 塚本明里氏の言葉（7/18 岐阜新聞より）

「このままでは中国の文学や芸術は言論弾圧が横行した文化大革命（1966～76年）の時代に戻る。礼賛や追従しかできないのなら真実の人生を描くことはできない」－国際的に反響を呼んだ著書『武漢日記』が、中国で事実上の発禁扱いとなった作家・方方氏の言葉（7/22 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑩ —



「一局ごとに違った局面、展開というのが出てくる。そういうところで、最善を追究していくのが難しさであり、面白いのかな。一步進むごとに新しい課題が見えてくる。将棋はゴールがないものかなと思う」－最年少の17歳11カ月で初タイトルを手にした藤井聡太棋聖の言葉（7/23 岐阜新聞より）

「新型コロナウイルス禍の今、まさに全世界がピンチ！誰かのせいにもしたくなるけれども、頭をちょっと柔らかくしたら、大人もまだまだ成長できるはず」－ラジオDJ・ナレーター 秀島史香氏の言葉（7/12 中日新聞より）

「地域の皆さんが支援に入ってくれ、地域の絆、つながりの大切さを再認識した。みんなでいいまちをつくりましょう」－高山市社会福祉協議会 小峠賢次事務局長の言葉（7/26 岐阜新聞より）

「用心するのは大事だけど、怖がっちゃいけない。ナーバスになると、精神も体も弱ってしまう」－NPO法人『地球元気村』村長・冒険家 風間深志氏の言葉（7/26 岐阜新聞より）

「差別は容易になくならないでしょう。でも少しでも減ればいいと思います。差別をされる方も悲しいし、人を差別して本当に気持ちいい人はいないと思います」－相模原障害者施設殺傷事件で娘・美帆さんを亡くした母の言葉（7/26 中日新聞・岐阜新聞より）

「県外の人には全国平均以上に親切に、寛容にしてほしい」－岩手県知事 達増卓也氏の言葉
(7/9 岐阜新聞より)

「芝居は対面が当たり前と思い込み、思考停止していたところがある。発想の転換はエンターテインメントの世界で生きる僕らにも求められていると思う」－V6 井ノ原快彦氏の言葉 (7/9 岐阜新聞より)

「友人から送られた情報でも真偽の判断が難しい場合は、『これ知ってる?』と別の人に広めないようにしてほしい」－法政大学 藤代裕之教授の言葉 (7/11 岐阜新聞より)



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑮ —



「ファクトチェック（真偽検証）への関心は高まっている。協力してくれるメディアや有志を増やし、根拠を確かめる習慣を社会に根付かせたい」－NPO法人ファクトチェック・イニシアティブ事務局長 弁護士 楊井人文氏の言葉 (7/11 岐阜新聞より)

「まだまだ続くウイルスとの生活。ルールを守らない人に怒りをぶつけるのではなく、不安とどう向き合うかが大切です。安心して生活できる保障を国に求めつつ、賢く生き抜いていきましょう」－骨の折れやすい障がいと電動車椅子を使いながら2人の子どもを育てるコラムニスト 伊是名夏子氏の言葉 (7/12 中日新聞より)

「新型コロナウイルスの感染拡大で使い捨てプラスチック容器などの使用量が増えている。プラごみによる海洋汚染と、ごみを燃やすことによって加速される地球温暖化の防止という緊急かつ重要な二つの課題を同時に解決すべきであることを忘れてはいけない」－東京農工大学 高田秀重教授の言葉 (7/12 岐阜新聞より)

「太古の昔、言葉の前に歌があったんじゃないか」－ラジオパーソナリティ・タレント・随筆家・作詞家 故・永六輔氏の言葉 (7/14 中日新聞より)

「国語を学んで得た力は、すぐに役立つものではありません。世の中や出来事を見る視点が変わったり、俯瞰して見られるようになったりする。お金もうけにはならないけれど、人生のためになる。豊かな人生につながるのです」－名古屋外国語大学・教授 国語教育者 村上慎一氏の言葉 (7/15 中日新聞より)

——今週、心に響いた言葉たち (15) 2020. 7. 16

「障害のある人たちは、これまでいろんな知恵で不便を克服してきました。そんな人たちの声はきっと社会に役立ちますし、聞かないのはもったいない。暗闇の中を導かれるように、今こそ、耳を傾けるべきではないでしょうか」－ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン 志村真介代表の言葉（7/1 岐阜新聞より）

「画面越しの生。その遠隔の世界で喜び哀しみ叫び、己の一回きりの人生を、精一杯旅していけますか。自身を置き去りにしたままで」－作家 諏訪哲史氏の言葉（7/3 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑭ —



「あなただけってコロナにかかるかもしれない。別の病気になったり、不況で経済弱者になったりする可能性もある。“自分もなるかもしれない”。そんな当事者意識を持つことが、誰もが住みやすい社会につながるんじゃないですか」－ハンセン病 元 患者 中修一氏の言葉（7/4 岐阜新聞より）

「自粛生活の中でも、人とは比較できない自分だけの幸せがあったはず。それを見つめることで、階段を一つ上ることができると思います」－『暮しの手帖』元 編集長 松浦弥太郎氏の言葉（7/5 岐阜新聞より）

「私は中学入試に落ちて1年間、近くの農園で虫を追ったり、本を読んだりして過ごしました。今思えば、そのときの経験も冒険への意欲につながっています。1～2年休んだっていい。苦しむまで自分を追い込むことはありません」－冒険家 三浦雄一郎氏の言葉（7/6 岐阜新聞より）

「やっぱり本当にこれまで当たり前にあったものが急になくなって、あらためて自分たちがどれだけ幸せだったかを感じた。あの幸せな場所にできるだけ早く戻りたい」－サッカーのドイツ1部リーグ、アイントラハト・フランクフルト所属 長谷部誠選手の言葉（7/6 岐阜新聞より）

「ひどい夢を見ても、すぐに反すうしないと忘れてしまうように、コロナの経験や感情を言葉に残しておきたいものです。一人きりでもっていた部屋だって、コロナの現場だったのですから」－社会学者 大澤真幸氏の言葉（7/6 中日新聞より）

「新型コロナがある以上、新しい日常に対応するすべをサポートの方に理解していただき、一緒に新しいステージに進みたい」－FC岐阜 宮田博之社長の言葉（7/7 中日新聞より）

「移動自粛は解除されたとはいえ、遠隔地への観光には慎重になりますよね。では、誰が観光業を盛り上げるのか。ほかならぬ地元の人だ、と私は思います。足元にある宝物を再認識する、いい機会にもなります」－商品ジャーナリスト 北村森氏の言葉（6/25 中日新聞より）

「東日本大震災からの“復興五輪、だった理念が、新型コロナウイルスの克服にすり替わってしまう。そんな危機感を強く抱いています」－復興ソフトボール大会主催 森田高士氏の言葉（6/25 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑬ —



「有権者の役割もすっかり変わると思う。従来の利益分配型でなく、情報を公開し、国と対等に話し合い、新しい価値観や政策をマニフェスト（公約）できる首長に信頼が集まるだろう。その意味で新型コロナは、選挙や民主主義の在り方を変える作用も持っている」－元三重県知事・早稲田大学名誉教授・早大マニフェスト研究所顧問 北川正恭氏の言葉（6/25 中日新聞より）

「院内でコロナに関わらなかった部署はないくらい、総力戦だった」－岐阜地域の総合病院医師の言葉。新型コロナウイルス患者が次々と運ばれてきた4月上旬を回想して。（6/27 岐阜新聞より）

「コロナウイルスは、生命を独立したものとしてのみとらえる現代の生命観に、変更を迫っているのだろう。独立した生命の基盤には結び合う世界があるという生命観に、いま私たちは立ち返ってみる必要があるのかもしれない」－哲学者 内山節氏の言葉（6/28 中日新聞より）

「ネット上に大量の意見が流れ、話題が日々更新されているのを見ていると、ハムスターの回し車を連想する。そろそろ生きる速度を遅くしないかと言いたい。腹が立ったら、自分が信じる“正しさ”について一日考える。それくらいのゆとりを持つべきだと思う」－作家 真山仁氏の言葉（6/30 中日新聞より）

「世界中の人々がつらい思いをしたが、みんなが当事者になったことがとても大事だ。社会と自分との関係、政治、税金の行方などに関心を持つ人も増えた。自然災害やパンデミック（世界的大流行）を共通の敵と捉え、人類全体を守ることを考えるようになれば、今の武力中心ではなく、人間の存在自体の安全保障のため、各国が協力できる時代になる」－至学館大学 谷岡郁子大学長の言葉（6/30 中日新聞より）

「社会風刺を入れるのが僕の作風ですが、社会が健全だからこそ、風刺が通用するのだと痛感しています。現実がここまで来てしまうと、もうパロディーでは、笑ってもらえませんね」—映画監督・河崎実氏の言葉（6/14 岐阜新聞より）

「私たちは感染を避けるため、ピューリタンのような清潔、道徳的、禁欲的な生活を強いられた。しかし本来は、これらは一過性の行動変容にすぎない。パンデミックが去ったら積極的に忘れて、三密を回復するべきだ。そして次のパンデミックが来たら、三密を回避する。そうした切り替えの柔軟性が求められている」—筑波大学教授・精神科医 斎藤環氏の言葉（6/16 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑫ —

「知識があっても、実際にやってみないと分からない。県全体の検査体制のバックアップも、私たちの使命だ」—県保健環境研究所・細井紀也所長の言葉（6/17 中日新聞より）

「休校期間中、一律一斉の授業をすることはできなくなった。私はこれを、学校での学びをより意義あるものへと転換するための好機としたいと考えている」—教育哲学者・笹野一徳氏の言葉（6/18 中日新聞より）

「自分の中の制度をリセットし、多様性を獲得していく。それは芝居だけの話ではなく、生きていくことそのものかもしれないと思うんです」—文学座に所属し、外部の舞台やオペラなどの演出も手掛ける鶴山仁氏の言葉（6/18 中日新聞より）

「蔓延するウイルスの下で大量の情報に振り回され、右往左往するわが身の姿を、一度鏡に映してみよう。そうしてとりあえず苦笑いの一つでも浮かべてみる。こころの余裕と冷静さが、人間を救うのだと思う」—作家・高村薫氏の言葉（6/18 岐阜新聞より）

「日本はなぜかコロナ感染・発症者が責められる国だ。家族は濃厚接触者そのものなのに、感染しても不思議なことに世間から責められはしない。コロナ禍にあって身体接触が唯一許容され、生死を共にする一蓮托生の存在が家族だと暗黙のうちに共有されている」—原宿カウンセリングセンター・信田さよ子所長の言葉（6/20 岐阜新聞より）

「多くの人が当たり前に行えることが、得意じゃない人もいます。そういう人が周りにもいるはずですよ。なかなか悩みを口に出せない人もいますが、もし相談されたら、話をじっくり聞いてみてください。きっと支えになれるでしょう」—青森市内で若者の居場所作りや自立支援に携わる長尾慶子氏の言葉（6/24 岐阜新聞より）

「今だからこそできる教育を考えたいですね。できないことを語るのではなく、今できることは何なのか。私たち大人が子どもに学ぶチャンスです」－大阪市立大空小学校初代校長 木村泰子氏の言葉（6/7 中日新聞サンデー版より）

「人間関係のバリエーションを豊かにしておくことが、リスクヘッジ（危険の回避）につながるんです」－日本総研主席研究員 藻谷浩介氏の言葉（6/8 岐阜新聞より）

「安らげる環境や自然、芸術は普段の生活に彩りを添えるだけでなく、健康なときも病むときも、命のもとを燃やしてくれる気がする」－呼吸器内科医・名取雄司氏の言葉（6/8 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑪ —



「日本にいとあまり認識しませんが、いろいろなことがうまくいっている国です。失敗だけでなく、成功した要因もしっかり分析し、教訓にして乗り越えていきましょう」

－カリフォルニア大バークリー校教授・物理学者 村山齊氏の言葉（6/9 岐阜新聞より）

「批判する人は必ずいますが、声の大きい人たちの陰には声を上げない何十倍もの人たちがいます。ネットを見て、世間をみたつもりになってはいけません。こうした教育がもっと必要だとも感じています」－情報リテラシー専門家 小木曾健氏の言葉（6/10 中日新聞より）

「人を笑わせるには、まず自分が楽しんでいないと。だから、この状況を楽しめない人は、お客さんを笑わせることなんてできませんよ」－漫才コンビ「ナイツ」塙宣之氏の言葉（6/11 岐阜新聞より）

「コロナという外圧が仕事にかけける時間や人数、お金を見つめ直すきっかけになった」

－4月に中部電力社長に就任した林欣吾氏の言葉（6/12 中日新聞より）

「知性とは高尚なものではなく、身近な者との日常的な対話の中で鍛えられていくものです」－早稲田大学・伊藤守教授の言葉（6/13 岐阜新聞より）

「例えば首都圏の朝の通勤ラッシュを思い浮かべると、それはどう見ても“アブノーマル、と言わざるを得ない姿だろう。こうした点を含め、ある意味で日本社会全体が過度な“3密、だったと言えるのではないだろうか」－京都大学こころの未来研究センター・広井良典教授の言葉（6/13 岐阜新聞より）

「食べ物は民族の文化の象徴です。クルド人に国家はないけれど、私たちの料理を守っていくことが民族の存在の証しになるのです」－クルド語辞典を日本で初めて編さん。東京でクルド料理店『メソポタミア』を営むワッカス・チョーラク氏の言葉（6/2 岐阜新聞より）

「ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）を保ちつつ連帯感を築くという二律背反をどう実現するか。面白いイノベーション（革新）も若い人の生きがいもそこから生まれるかもしれない」－東京大学名誉教授・日本文学研究者 ロバート・キャンベル氏の言葉（6/3 岐阜新聞より）

七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑩ —

「世界が意外と単純に変わってしまうことを実感した人たちは、非常に揺らぎを感じ、社会全体に対する不安や憤りや新しい予感を持っていると思います。その感情がまた、新しいアートを生み出す原動力になるはずですよ」－メディアアーティスト・落合陽一氏の言葉（6/4 中日新聞より）

「経済的な心配は重々承知していますが、今後も一定の接触を避けることは必要。終焉はワクチンができるまでです」－木沢記念病院副院長・感染対策医 山田実貫人氏の言葉（6/4 中日新聞より）

「コロナ後は、金銭至上主義の考え方から抜け出し、どう社会をつくり直していくかが問われている。しかし、私たちは、持ち前の自粛力で乗り切ったと勘違いし、また経済を追い求めてしまうのではないだろうか…」－東海テレビゼネラルプロデューサー 阿武野勝彦氏の言葉（6/4 中日新聞より）

「オンラインと対面の学習機会を、いかにブレンドするかがポイントだ。仲間や先生がいて、就活の愚痴なんかをこぼし合いながら学び合う共同体と、みんながモバイルな状態で結ばれるオンラインネットワークは、どちらも大切だ」－東京大学 水越伸教授の言葉（6/5 岐阜新聞より）

「時間と場所を共有するという人々のふれあいを代替するデジタルツールを使えば使うほど、その限界が分かる」－共同通信編集委員 岩川洋成氏の言葉（6/5 岐阜新聞より）

「もう国民がしっかりするしかありません」－コラムニスト 辛酸なめ子氏の言葉（6/7 岐阜新聞より）

「演劇はサクランボと同じで、実を採って味わうまでに何年もかかる。でも今、その根っこが枯れてしまうんじゃないかという状態になっている」－俳優・渡辺えり氏の言葉（5/23 岐阜新聞より）

「長く否定的に見られてきた引きこもりは今、最も推奨される生き方になりました。こうした社会に即した表現が生まれ、過去に匹敵するほどの動きが生まれる可能性は十分あると私は思います」－美術評論家・榎木野衣氏の言葉（5/23 岐阜新聞より）

「現役時代にレギュラーを外されて落ち込んだ。傷心で街を歩いていたが、すれ違う人は誰も自分のことなど見ていない。ふと、自分が自分で思い詰めているだけだと気づいた」－サッカー日本代表・森保一監督の言葉（5/23 中日新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑨ —



「技術練習が思うようにできない不安はあるが、今は体力を維持するだけでなく、パワーアップできるまたとない機会。できるトレーニングを重ねることで、持久力や体幹の筋力を強化できたと感じる」－パラバドミントン世界選手権銅メダリスト・伊藤則子氏の言葉（5/24 中日新聞より）

「“全否定”の前に立ち止まって考えることも必要ではないでしょうか」－漫画家・いがらしみきおさんの言葉（5/24 岐阜新聞より）

「物事をどう捉えるかは個人の判断。未来をつくっていくことを考えた方がいい」－世界ボクシング協会（WBA）ミドル級王者・村田諒太氏の言葉（5/27 中日新聞より）

「不安は全くない。1年後に全力で臨むこと以外は何も考える必要はない」－カヌー・スラローム男子カナディアンシングルで五輪4大会連続代表の羽根田卓也選手の言葉（5/28 岐阜新聞より）

「悲観的にならず、小さな幸せに浸ることも大事です」－お笑い芸人コンビ『パッケンマックン』パッケン氏の言葉（5/30 岐阜新聞より）

「知人からの連絡や味覚障害の症状がなければ、出歩いて感染を広げたかもしれない」－新型コロナウイルスに感染し退院した県内在住男性の言葉（5/31 岐阜新聞より）

「けれども、究極的には“生きもの”である私たちは、べたべたの濃厚接触のなかで生まれ、死んでいく。だから『オンライン保育』や『オンライン介護』は決して可能にならないのだ」－関西学院大学・貴戸理恵准教授の言葉（5/17 中日新聞より）

「でも、本当はみんな、どっかで気付いているんだよ。富をつくるためにそぎ落としていた『余裕』の中に、大事なものがあるってことにさ」－日本人初の宇宙飛行士・秋山豊寛氏の言葉（5/18 中日新聞より）

「この年になっても、絵描きとして国や社会に貢献できることを誇りに思う」－ベトナム政府が開催した新型コロナ対策のプロパガンダ（政治宣伝）アートコンテストで入選。76歳の画家チャン・ズイ・チュック氏の言葉（5/18 岐阜新聞より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑧ —



「試合ができないことのストレスはありません。この状況ではやれないでしょう。不安？ お店をやっている人と比べると、本当に僕らは大したことないなと思います」－プロ野球ソフトバンク・内川聖一選手の言葉（5/19 岐阜新聞『心をたもつヒント』より）

「論理だけではなく、演出家としての感性を大事にして自分の言葉で伝えると、皆人種を超えて、互いに違う価値観を受け入れることができた」－ロンドン・ナショナル・ギャラリー演出家 藤田俊太郎氏の言葉（5/20 岐阜新聞より）

「未来は分からない。何事にも絶対はない」－東京五輪・自転車トラック種目男子オムニウムで代表確実と言われる橋本英也選手の言葉（5/20 岐阜新聞より）

「利他の“他”とは、まずはこの結果の分からなさ、制御できなさなのだと心得るべきだろう」－美学者・伊藤亜紗氏の言葉（5/21 朝日新聞より）

「最近、服って人間が入る一番小さな空間だなと改めて感じる」－『ミナペルホネン』デザイナー・皆川明氏の言葉（5/21 朝日新聞より）

「ぼくには絵もロボットも、人を理解し、表現する手段。結局は“人とは何か”と考えて研究をされていて、何をやってもそういう道に進んだと思います」－人間そっくりのアンドロイドを研究するロボット学者・石黒浩大阪大学教授の言葉（5/22 岐阜新聞より）

「命や生活を守るためにも徐々に、着実に解除していくことが重要だ」

—ゲドロスWHO事務局長、5月11日記者会見での言葉（5/13 岐阜新聞より）

「ストレスがあることを当たり前だと思って行動している」

—FC岐阜・竹田忠嗣主将の言葉（5/13 中日新聞より）

「危機に際して現れる本当の姿は当事者には認めたくないものが多い。しかし、それを自覚することなしに危機を乗り越えることはできない」—（5/14 岐阜新聞「社説」より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑦ —



「ただ、情報との距離感は意識するようになりました。全てを受け止めてしまうと疲れてしまう」—女優・秋元才加氏の言葉（5/14 中日新聞『心をもつヒント』より）

「では、ウイルスが蔓延する時代にどんな社会が強靱な抵抗力を持つのか。まずは自然破壊の手を緩めることだ」—京都大学・山極寿一総長の言葉（5/14 朝日新聞より）

「人間の本能に変化がないとすれば、新型コロナウイルスが流行する間は清貧な思想が尊ばれ、収束した瞬間に“欲”が爆発するのだろう」

—東洋大学国際学部・横江公美教授の言葉（5/14 毎日新聞より）

「ポストコロナの世界では、美術作品のあり方も大きく変わる。既に、実際の美術館で見せるものとバーチャル空間で見せるもののバランスが変わってきた。」

—東京芸術大学・毛利嘉孝教授の言葉（5/14 読賣新聞より）

「いつかは明るい空が見えると信じて、毎日を大切にすごしましょう。きっとこの一日一日に意味があるはずです」

—東京パラリンピックカヌー競技・瀬立モニカ選手の言葉（5/15 岐阜新聞より）

「互いに感染しない、感染させないために、社会がもう少し寛容になることも大切だ」

—国立病院機構三重病院・谷口清洲医師の言葉（5/15 中日新聞より）

「すべてがぱっと解決する魔法なんてないけれど、今の状況に押しつぶされずに考えたことは、必ず明日の力になる。それはそう、一つの魔法ですよ」

—児童文学作家・角野栄子氏の言葉（5/16 中日新聞『心をもつヒント』より）

——今週、心に響いた言葉たち（7）2020.5.18

「まさに今のリアルから学ぶことにより『自分の人生をどうしていきたいか』を考え、行動する主体性が引き出されます」－愛知教育大学非常勤講師・上井靖氏の言葉（5/9 中日新聞より）

「人間は生命よりも、生きる意味を上位に求める生き物だ。生きる意味が感じられない状況では、時に自死を選んでしまうことすらある」－2001年と05年の世界選手権で陸上男子400m障害銅メダル、五輪3大会連続出場を果たした為末大氏の言葉（5/9 岐阜新聞より）

「逆にコロナショックの教訓は、時間軸の『分散化』こそが感染防止に役立つこと。時差通勤やテレワークが典型ですよ。多様な時間軸が併存する社会の方が、むしろ危機に対して強いんです」－歴史学者・與那覇潤氏の言葉（5/9 岐阜新聞より）

七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑥ —

「人類の発展繁栄とは、経済のための狂奔だった。声高に叫ばれていた『グローバリズム』もその一翼を担っていた。結果、すべてが『過剰』になっていたのだ。“コロナ”の悪意は人類の欲望と熱狂に冷水を浴びせたのだった」－エッセイスト・飛鳥圭介氏の言葉（5/10 中日新聞（サンデー版+テレビ）より）

「私たちはこれまで物質的な豊かさや経済発展を優先しすぎて、本来の人間らしい感情的な豊かさや人とのつながり、家族の大切さ、環境への配慮をおろそかにしてきたのではないか」－アフリカのバラ農園の雇用創出を目的にバラを販売するアフリカローズ代表取締役・萩生田愛氏の言葉（5/10 岐阜新聞より）

「最後に、不確実な未来に耐えること。これから新型コロナがどのように広がるのか、どれだけ続くのか、誰にも分かりません。シナリオは一つではありません。おそらく数年にわたり、私たちは、見通しの立たない社会を生きることになります」－沖縄県立中部病院 高山義浩医師の言葉（5/11 中日新聞より）

「異なる考えの持ち主にも開かれている。是非議論したい」－中国共産党批判の書店を台北で再開した店主・林榮基^{りんえいき}氏の言葉（5/11 岐阜新聞より）

「症状が軽い、ない人が多くいる。（実際は）10倍か15倍か20倍というのは誰も分からない」－尾身茂・政府専門家会議副座長、5月11日参院予算委員会での言葉（5/12 岐阜新聞・中日新聞より）

「世界中が同じ駆動力に動かされているこの状況で、だからこそくつきりするの、それぞれの共同体のあり方なのである」—作家・赤坂真理氏の言葉。(5/2 岐阜新聞より)

「予防策は何か？ 自然生態系の保全と、人間の免疫力だ。現代文明は、この二つをないがしろにしてきた」—作家・正プラス代表・オークヴィレッジ創設者（現会長）、稲本正氏の言葉（5/2 岐阜新聞より）

「パラリンピックで記録を狙うためには、延期はチャンスだと思う」—パラリンピック陸上男子 100 メートル、400 メートル 日本記録保持者・石田駆選手の言葉（5/3 中日新聞より）

「権利と自由は今、マスクをはめられているようである。息苦しい」—（5/3 中日新聞『中日春秋』より）



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑤-1 —



「僕は勝つことだけを、メダルを目指した。勝利やメダルという『結果』が夢だった。でも、その夢を叶えた後、どうしても幸せを感じられなかった」—北京五輪陸上男子 400 メートル リレー銀メダル・末続慎吾氏の言葉（5/3 読賣新聞より）

「政府が指示しなくても民衆が暴走し、同調圧力によるいわれなき差別や排除が世界的に起きています。警戒が必要です。

人は誰でも偏っています。しかし、常に中間を求める努力を欠かしてはなりません」

—近現代史研究者 辻田真佐憲氏の言葉（5/3 読賣新聞より）

「テレワークは、新規ネットワークの拡張を困難にし、すでに人脈や名声を持っている人に仕事の依頼を集中させてしまうかもしれない」—大阪市立大大学院准教授・斎藤幸平氏の言葉（5/3 毎日新聞より）

「誰かを守ることは自分を守ることであり、知らない誰かも自分も、ひとつひとつ身体の中の一部のような存在なのだと思う」—（5/3 毎日新聞『日曜くらぶ』より）

「人間は移動範囲を広げることで、様々なものを得てきました。ただ、物事にはプラスの面があればマイナスの面もあります。そのマイナスの面の一つが、感染症の拡散です。移動の自由や喜びを得た当然の副作用として、人類はウイルスとの共生を覚悟する必要があります」 —環境ジャーナリスト・石弘之氏の言葉（5/3 朝日新聞『GLOBE』より）

七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ⑤-2 —

「すでに現状は、平時には考えられなかった『温室効果ガスの削減実験』になっている。人類がこれまで顧みなかった自らの可能性に気づき、危機の本質は病原体でなく人類同士の対立にあると認識すれば、新たな連帯と協調に向けた動きが真の力を持つだろう」

—京都大学教授・中西寛氏の言葉（5/3 毎日新聞より）

「この機会に私たち大人も、変わっていかなくてはならないと考えます。子どもは、黙っていてもその姿で大人を評価しているのですから」 —情報モラル教育研究所 上水流信秀代表の言葉（5/4 岐阜新聞より）

「医療従事者はウイルスによる『疾病』、治療法がない『不安や恐れ』、社会の『嫌悪・差別・偏見』の三つの困難と闘っている」 —日本看護協会 福井トシ子会長の言葉（5/6 中日新聞『社説』より）

「人間の想像力に外出自粛はない。どこにいても、いつでも何の抑制も受けることなく想像できる。それを持ち続けていれば大丈夫。想像力がある限り、文化芸術は停滞しない。みんな分かっていると思う」 —岐阜県美術館館長・東京芸術大美術学部長 日比野克彦氏の言葉（5/6 岐阜新聞より）

「孝子伝説をほうふつとさせる透明感あふれる滝は、再び多くの観光客であふれる日を夢見るように静かに流れ続けている」 —（5/8 岐阜新聞『西濃水景色：養老の滝』より）

「私たちは科学を重視し、政府を重視し、市場のあり方を根本的に見直した、新たな秩序作りに向うと私は考えます。それは、一握りの国や人ではなく皆が富を共有できるような、新たなグローバル化の模索であるはずです」—2001年ノーベル経済学賞を受賞した米コロンビア大教授、ジョセフ・スティグリッツ氏の言葉（4/26 読賣新聞より）

「長い時間でものを考えないから重要なエビデンスを見落とし、現場を知らないから緊張感に欠け、言葉が軽いから人を統率できない。アドリブの利かない痩せ細った知性と感性では、濁流に立てない」—京都大学人文科学研究所准教授 藤原辰史氏の言葉（4/26 朝日新聞より）

「風刺の力が境界線をあいまいにし、新たな「連なり」の礎となる。首相、これが文化です」—朝日新聞編集委員 吉田純子氏の言葉（4/26 朝日新聞『「うちで踊ろう」考』より）

七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④—1 —

「問題は、早く回復しそうな国も危機からの脱出を急ぐ国も、多かれ少なかれデジタル監視と厳罰や、軍や警察の実力で、人々の行動を抑えていることだ」—朝日新聞国際社説担当・真田正明氏の言葉（4/26 朝日新聞『社説余滴』より）

「競技の息抜きが研究で、研究の息抜きが競技」—練習が十分できない分、トレーニングの方法や効果、メカニズムを解説した論文を積極的に読み込む男子走り高跳び日本記録保持者、戸部直人氏の言葉（4/27 岐阜新聞より）

「世の中から笑いがなくなることはない。やってもいいよっていう時期が来れば、僕たち大道芸人はどんな場所でも人を集め、笑顔になれる空間を作る自信がある。だから消えない」—科学実験ショーとアクロバット芸を組み合わせた『アクロバット・サイエンスショー』を展開する大道芸人・くす田くす博氏の言葉（4/29 岐阜新聞より）

「とりあえず、あと1キロ、あの電柱まで頑張ろうと自分に言い聞かせた」—メキシコ五輪男子マラソンで銀メダルを獲得した君原健二さんの言葉（4/30 岐阜新聞『分水嶺』より）

「この環境は平等に与えられている。この機会をどう使うかと考えないといけない。会員にはそうやってほしい」—2020年度岐阜同友会代表理事に就任した鈴木哲馬氏の言葉（4/29 岐阜新聞『コロナ対策緊急インタビュー』より）

——今週、心に響いた言葉たち（4）—①2020.5.1

「私は、「平和」とは「戦争」をしていない状況というだけではなく、その人がその人らしく自分を大切に生きていく状態であることだと思っています」—俳優・東ちづるさんの言葉（4/26 朝日新聞より）

「エンタメにはウイルスから体の健康を守る力はなくとも、心の健康を守る力はあるはず。人々の心を潤し、和ませ、奮い立たせる作品を届けていくこと。それが私たちの使命だと確信しています」—恵那市出身、ホリプロ専務・鈴木基之氏の言葉（4/29 中日新聞『コロナ対策緊急インタビュー』より）

「温暖化の進行は、新たな感染症の発生や拡散に関連があるとも言われています。若者たちの未来に、もうこれ以上、禍根を残してはいけません」（4/29 中日新聞社説『温暖化も非常事態だ～コロナ禍に考える』より）

七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち ④—2 —

「今回のパンデミックは、豊かさだけでなく、不幸も国境を越えて共有するのがグローバル化の特徴だと私たちに知らしめました」—名古屋外国語大学学長、ロシア文学者・亀山郁夫氏の言葉（4/29 中日新聞より）

「危機が迫った時、最初にやることはオオカミが来たと呼ぶことではなく、データを整理することだ」—医学と統計学を学んだ医師、ハンス・ロスリング氏が世界で200万部超のベストセラーとなった著書『ファクトフルネス』の中で。（4/30 中日新聞社説『本能に支配されないで～コロナ禍に考える』より）

「新型コロナウイルスの影響で外出できない人も多いが、絵の中を旅してほしい」—日本画家・川合玉堂の作品『晩^{ばん}帰』を紹介した岐阜県美術館、青山君子学芸員の言葉。（5/1 中日新聞より）

「防災の準備を楽しみましょう。びくびくしながらでなく、生活の一部にするのです」—名古屋大減災連携研究センター長・福和伸夫教授の言葉（5/1 中日新聞社説『「複合災害」に備える～コロナ禍に考える』より）

「しかし同時配信は「ライブ」ではありません。人と人とが遭遇し、学び、輝き、^{うた}謳い生きるため、大学はあります。」—作家・諏訪哲史氏の言葉（5/1 中日新聞『諏訪哲史のストン教』より）

——今週、心に響いた言葉たち（4）—②2020.5.1

「自然から収奪する形での成長がもはや行き詰っている以上、変化は、おのずから成熟を目指す方向となる」—解剖学者・養老孟司氏の言葉（4.21 岐阜新聞『心をもつヒント』より）

「部屋の扉を開けると、台所をまだぐようにして1本のビニールひもが張られていた。「ウイルスが入らないようにした」とわが子。3歳なりに非常時を感じ取っているのだろう」—岐阜新聞遊軍兼名古屋支社記者・山田俊介氏の言葉（4.22 岐阜新聞『記者ノート』より）

「神戸に来たのは選手としてだけではない。サッカーの考え方や人生観を教えている。興味を持ってくれる子どもたちや親に感謝したい」—Jリーグ中断が長引くなかで近況を語ったJ1神戸の元スペイン代表MF、アンドレス・イエニスタ氏の言葉（4/23 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③ —

「依然として厳しい状況が続いている。大型連休を迎えるが、緩むと振り出しに戻りかねない」—4月23日岐阜県対策本部の本部員会議における古田肇知事の言葉（4/24 中日新聞より）

「どのいのちも見棄てない、弱い人から順に護る、人に贈れるものは贈る。人類が最低限の志操としてこれまで育もうとしてきたものが、いまぎりぎりのところで試されている」—哲学者・鷲田清一氏の言葉（4/25 中日新聞より）

「あがいてあがいてあがきまくって、悪あがきしてやる」—プロ野球開幕の日程が見通せない中、古巣・西武で再起をめざす松坂大輔投手の言葉（4/25 岐阜新聞より）

「今や純粹に『最良の選択』というものは残されていないのかもしれない。私たちはいくつかの必要悪のなかから、生きるために犠牲がもっとも少ない道を選ぶことになるようだ」—カリフォルニア大ロサンゼルス校教授・日本文学研究者 マイケル・エメリック氏の言葉（4/25 岐阜新聞より）

「今できることは何かを毎日考えている。いつ試合が始まっても大丈夫なように過ごしている」—国内女子ツアー4勝の女子プロゴルファー・勝みなみ氏の言葉（4/25 毎日新聞より）

「かの粹人、北大路魯山人は、美食のコツはと聞かれて、ひと言、こう答えたといひます。『空腹』」—（4/26 中日新聞『社説：寂しさを貯めておく』より）

「それは考えてねーじゃん。悩んでいるだけじゃん」—鴻上尚史氏（作家・演出家）が大学時代、前例のないプロ劇団を立ち上げることへの不安を打ち明けた先輩から帰ってきた言葉（2/20 朝日新聞夕刊より）

「人とのつながりが一番の財産」—100 を超える大会に出場した全盲のマラソンランナー・青竹レイ子さんの言葉（4/16 中日新聞より）

「今の状況を乗り切るには、読書でも。植物を育てるでもいい。逃げるのではなく、現実から少し距離を置いてもいいのではないのでしょうか」—立命館大学 富永京子准教授の言葉（4/16 岐阜新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ② —



「各国で空気もきれいになっているという。経済活動の停滞による一時的なこととみられるが、やればできるという声が耳元に響くようでもある」—（4/17 中日新聞『中日春秋』より）

イタリア・コンテ首相の言葉「明日、抱きあうために、今日は距離を取ったままでいよう」
ドイツ・メルケル首相の言葉「第二次世界大戦以来、わが国にこれほどまでに連帯を求められる試練はなかった」
—（4/17 中日新聞より）

「命が一番大事。正しい判断をした」—1月に開幕し盛況だったトップリーグの中止決定を受けて。昨年のW杯日本大会で代表主将を務めたリーチ・マイケル（東芝）選手の言葉。（4/18 中日新聞より）

「3.11の時の夜空のように、真っ暗だからこそ見える光があると信じています」—フィギュアスケート男子で冬季五輪2連覇・羽生結弦選手の言葉（4/18 中日新聞より）

「この感染症は接触を大幅に削減すれば流行を止めることができる」—厚生省クラスター対策班メンバーの西浦博北海道大学教授の言葉（4/20 中日新聞『News 週イチチェック』より）

「気づき、それを相手に確認し、想像して共感する。それは医療関係者にとって、とても大事なことなのだ」—呼吸内科医・名取雄司氏の言葉（4/20 岐阜新聞より）

「被災者支援には、コミュニティレベルの『共助』を継続していくべきだ」—東日本大震災後、仮設住宅で暮らす人々の心理的苦痛を研究し、相談相手がいない人ほど相対的に苦痛が大きいという結果を発表した東北大歯学研究科非常勤講師(発表当時)杉山賢明氏の言葉。(4/11 岐阜新聞より)

「ここまで積極的で迅速に行ったクラスター対策は全国にもあまりない」—4月10日、可児市の合唱団・スポーツジムで発生したクラスターに対し終息宣言をした国のクラスター対策班の言葉(4/12 岐阜新聞より)



七コロナ八起き

— 今週、心に響いた言葉たち —



「今は彼らが日本代表だ。拍手を送って応援するとともに、物資も含めて最大限の支援をしてもらいたい」—コロナ感染から復帰した日本サッカー協会の田嶋幸三会長が、医療従事者への敬意をこめて語った言葉(4/12 岐阜新聞より)

「これを準備期間ととらえれば、日本男子にとってはチャンスだろう」—日本体操協会の水島寿思男子強化本部長の言葉。出場年齢の加減が見直されれば、新たなホープが代表争いに加わる可能性もあることをふまえて(4/14 中日新聞より)

「ここまで広がった今は、自分が既に感染して、たまたま発症していない状態だと想定して、“他の人にうつさない”の意識を持って生活することにしました」—腺様嚢胞がんで舌を切除。肺に多発転移を抱え、今も抗がん剤治療中の荒井里奈さんの言葉(4/14 中日新聞より)

「自由を守るための試練だ—感染防止に向けた私たち一人一人の行動が、自由という、かけがえのない権利を守るためにも肝要なのだと考えたい」—緊急事態宣言から1週間が経過。『自由を守るための試練だ』との見出しにて(4/14 岐阜新聞「社説」より)

「いまは、体の距離はとったほうがいいけれど、心の距離をとりすぎてしまうのは、寂しい」—2011年『きことわ』で第144回芥川賞を受賞した作家・朝吹真理子さんの言葉(4/15 岐阜新聞より)

「自然から収奪する形での成長がもはや行き詰っている以上、変化は、おのずから成熟を目指す方向となる」—解剖学者・養老孟司氏の言葉（4.21 岐阜新聞『心をもつヒント』より）

「部屋の扉を開けると、台所をまだぐようにして1本のビニールひもが張られていた。「ウイルスが入らないようにした」とわが子。3歳なりに非常時を感じ取っているのだろう」—岐阜新聞遊軍兼名古屋支社記者・山田俊介氏の言葉（4.22 岐阜新聞『記者ノート』より）

「神戸に来たのは選手としてだけではない。サッカーの考え方や人生観を教えている。興味を持ってくれる子どもたちや親に感謝したい」—Jリーグ中断が長引くなかで近況を語ったJ1神戸の元スペイン代表MF、アンドレス・イエニスタ氏の言葉（4/23 中日新聞より）



七コロナハ起き

— 今週、心に響いた言葉たち ③ —

「依然として厳しい状況が続いている。大型連休を迎えるが、緩むと振り出しに戻りかねない」—4月23日岐阜県対策本部の本部員会議における古田肇知事の言葉（4/24 中日新聞より）

「どのいのちも見棄てない、弱い人から順に護る、人に贈れるものは贈る。人類が最低限の志操としてこれまで育もうとしてきたものが、いまぎりぎりのところで試されている」—哲学者・鷲田清一氏の言葉（4/25 中日新聞より）

「あがいてあがいてあがきまくって、悪あがきしてやる」—プロ野球開幕の日程が見通せない中、古巣・西武で再起をめざす松坂大輔投手の言葉（4/25 岐阜新聞より）

「今や純粹に『最良の選択』というものは残されていないのかもしれない。私たちはいくつかの必要悪のなかから、生きるために犠牲がもっとも少ない道を選ぶことになるようだ」—カリフォルニア大ロサンゼルス校教授・日本文学研究者 マイケル・エメリック氏の言葉（4/25 岐阜新聞より）

「今できることは何かを毎日考えている。いつ試合が始まっても大丈夫なように過ごしている」—国内女子ツアー4勝の女子プロゴルファー・勝みなみ氏の言葉（4/25 毎日新聞より）

「かの粹人、北大路魯山人は、美食のコツはと聞かれて、ひと言、こう答えたといひます。『空腹』」—（4/26 中日新聞『社説：寂しさを貯めておく』より）